

「従う者に賜わる聖霊」

岡南教会 金井信生



それからすぐ、イエスは群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。

マタイ14・22

岡南教会では10時半からの礼拝に先立って、30分間「成人科」のときをもっています。

一九八〇年から鈴木牧師によって始められ、聖書講解、信仰入門、基本教理、教会生活、奉仕の心得など、テーマを変えながら継続してきました。説教準備に加えて、成人科のテキストを用意することは確かに負担がありますし、一つのテーマが終わるころになると、次は何にしようかと頭を悩ませます。聖書講解や教理解説なら、一応専門職の範囲ですからまだよいのですが、テーマを広げると後悔することになります。

昨年後半から「信仰者伝」を始めました。信仰者の伝記を読んで励まされたというお証しや勧めを以前から聞くこともあり、きっかけづくりにと思ひ取り上げてみました。

名前のよく知られている人ばかりですし、自分でも何となく知っているつもりでしたが、改めて調べてみると驚きあり感動ありです。

先日、テレビの美術番組でミレーの「落穂拾い」について放送されていました。発表された当時は評価が低かったこと、ルツ記も題材の一つであること、なぜ三人なのかなど、謎が解き明かされていました。「信仰者伝」で先にミレーを取り上げていたので、背景もよくわかり、学びがさらに深められました。

「勉強」という言葉は「強いて勉める」、努力して困難に立ち向かうというのがもともとこの意味だったそうで、「学習する」は、一つの実例だったそうです。

「強いられる」ことは、あまりうれしくはないかもしれませんが。しかし聖書には、イエス様が弟子たちを「しいて」舟に乗り込ませ、その舟が夜じゅう漕ぎ悩んだことが出てきます。弟子たちが従わなければ、「我なり、恐るな」の言葉をいいたくことはできませんでした。

教会での奉仕や、家庭や社会で人に仕えること、従つことなど、率先してすることは幸いです。でも多少強いられている思いがあっても、主の御旨の内にあるなら、従いましょう。聖霊が働いて恵みの高嶺に引き上げてくださいます。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「みことばが語りかける説教」(後半)	4
旧約⑦「ヨシユアと士師たち」《10/7 ～ 10/21》	15
キリストの教えと働き《10/28 ～ 11/25》	33
クリスマス《12/2 ～ 12/30》	63
牧羊ひろば(明野キリスト教会)	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1、原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。

2、礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 「ホーリネス・」〔ホ・〕……………日本ホーリネス教団
 「インマヌエル・」〔イン・〕……………インマヌエル教会学校部
 「日キ・」……………日本キリスト教団出版局

キリストの恵みに応えて

マタイ 21・3

旧約⑦「ヨシユアと士師たち」

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月7日	神の方法による勝利	ヨシユア 6・1〜20	ヘブル 5
14日	勇士として立つ	士師 6・7〜16	同上 12
21日	聖別による力	士師 16・15・4〜226	同上 17

●キリストの教えと働き

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月28日	罪赦された者として	ルカ 7・36〜50	同上 47
11月4日	近づき助ける	ルカ 10・25〜37	同上 36
11日	神に立ち返る	ルカ 15・11〜24	同上 24
18日	死後への備え	ルカ 16・19〜31	同上 29
25日 収穫感謝	恵みへの感謝	ルカ 17・11〜19	同上 18

●クリスマス

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
12月2日 アドベント	主の道を備えよ	ルカ 3・1〜6	同上 4
9日	キリストの恵みを知って	IIコリント 8・1〜15	同上 9
16日	救い主としての誕生	マタイ 1・18〜25	同上 21
23日 クリスマス	王なるキリストを迎える	マタイ 2・1〜12	同上 2
30日 年末感謝	万事感謝	Iテサロニケ 5・16〜18	同上 18

「みことばが語りかける説教」

～教会学校説教への備えのために～（後半）

西大和キリスト教会 宮澤清志

二〇二一年度 大阪教区「CS教師研修会」講演



Ⅳ. 説教原稿（メッセージノート）を作る

説教が形作られていくのです。

①説教のスタイルと構成要素

前号（前半）においては、メッセージの内容について語りました。これまでの流れを大まかにいえば「み言葉から聴く工程」、「み言葉が語りかけてくる工程」を学んだわけです。そして、これからの工程は「み言葉を語る工程」へと入っていきます。

まず、これまでの流れをつかむためには「ノート」を用います。これまでの黙想の中でためてきたノートを読み返してみます。それらを整理していくことによって、

教会の歴史の中では、様々な形で説教が語られてきましたし、今もなお様々な形で説教が語られています。いくつかの説教のスタイルはあるのですが、どのスタイルが最善かということはありません。語る説教者によっても異なりますし、語る場においても異なるからです。ですから、説教スタイルの善し悪しをここで取り上げることはできませんが、説教のもつ構成要素については、お

おまかに以下のように展開されると思います。

a. 導入

導入は、これから語られることに期待感を呼び起こす働きを持ちます。聴き手をワクワクさせる言葉を語ります。これからどんな話が始まるのか、聴き手の心を話し手とその語るメッセージとに引きつけるのです。具体的には、先週のメッセージの復習（橋渡し）であったり、中心聖句や主題のための問いかけ、あるいは近況にも多少触れながら、聴き手の心を話し手に向ける語りかけになるでしょう。

- (1) この導入に関しては、三つの目的があるといわれます。
- (2) **興味と関心をよび起す**
- (3) **主題を提示する**
- (3) **話の方向付けとムードづくり**

最近身近に起こった出来事や、子どもの心のニーズなどから、導入の突破口を開くこともできます。同時に語り手が独特のキャラクターをもっている場合、それらも

導入の良い要素となります。この学びも、やはり聖書が示してくれます。主イエス様がその教えに際して語られた導入、たとえばニコデモとの対話に際しての導入（ヨハネ3章）や、サマリヤの女性との対話で用いた導入（ヨハネ4章）を学ぶことは、よい例となるでしょう。

b. 本論（展開）

導入において子どもの心をひきつけたら、次は本論に入ります。この部分が真の中心となります。

聖書のストーリーを追いかける「再話」が中心となります。聴き手を、その聖書箇所時代の状況へとタイムスリップさせるのです。その聖書箇所の話の中で起こっていることを再び語り直すのです。ここで大切なことは、聖書の中の登場人物がイエス様と出会う時には、聴き手の子どもたちも一緒になってイエス様と出会うということです。この時に、聴き手の言葉、イエス様の招きの言葉や適用、例話などを用いながら、子どもたちを聖書の世界に引き込むのです。

c. 結論

今まで話してきたことの結びです。「そうだ！ほんとうだ」と自然に納得できるような結びが必要です。他人ごとではなく、自分のこととして受け取らせることが必要なのです。「さあ、あなたはどうしますか」と、子どもの決心を促す言葉を最後に語りましょう。

だからといって、「だからこうしましょう」というような、いわゆる紋切型のような結びでは、あまり幼子の心に届きません。すべての幼子に救いの言葉が語られ、幼子もその言葉を救いと希望の言葉として聞く結びでありたいものです。

以上の骨組み（説教の構成要素）を考慮しながら、いよいよ原稿にメッセージを落としていきます。そこで、そのために心に留めるべき注意点を列挙します。

②原稿作成の注意点

a. 主題を大切にす

「主題」は、説教全体を貫く柱です。導入から適用、結論に至るまでの一貫した流れの中心にあるものです。

すべての流れがこの主題から流れ出ます。大人の説教でしたら多少脱線しても比較的時間はあるものです。しかし、子どもの説教は短時間です。脱線をする時間的余裕はありません。脱線してメッセージがぼやけることのないように、常にこの「主題」を意識して備えましょう。

b. コンパクトにまとめる

ポイントをしぼってコンパクトに、メッセージ全体をまとめたものにします。メッセージの所要時間は子どもの年齢や語る状況によつて異なりますから、一概に決めることはできません。しかし、コンパクトであるということは共通して求められます。一生懸命準備したものの、すべてを語りたくなるものです。しかし、主題と離れたものは、あえて捨てる勇氣を持つことは大切なことです。準備したことは決して無駄にはなりません。

c. 想像力を働かせる

まず、備えのうちに、聖書のストーリーの中に自らが入り込むようにして備えることが肝要です。聖書のイメージをふくらませましょう。登場人物の心の動き、情景を

感じ取りながら備えることです。しかし、同時にそのようなイメージが頭の中だけで留まっているならば、十分伝達することはできません。その想像力を五官をつかって表現するのです。効果的に、楽しく子どもに伝達する工夫をしましょう。

d・補助教材を考える

メッセージのストーリーと主題を考えながら、補助教材を考えます。子どもたちの状況や語る状況、自分自身の賜物をよく考えながら、どのような補助教材がふさわしいか、よく検討します。自分の得意な補助教材を持つことも大切です。しかし、同時にバリエーションを持つことも必要です。しかし、あくまでも補助教材です。どんなに便利でも、「はじめに補助教材ありき」ではありません。まずみ言葉からの語りかけが優先されます。また、補助教材であっても利点と欠点があることもわきまえながら、準備したいものです。

- 一般的に、補助教材（特に視聴覚教材）の利点としては、
- ・興味を喚起する（特に導入には効果的）
- ・理解を助け、記憶に残る

- ・現代の日本とは時代、場所、文化が異なる聖書の世界を説明するには良き助けとなる。

一方、欠点としては、

- ・それなりの準備が必要
- ・その視聴覚教材を使用する目的がはつきりしないと、かえって主題がぼやけてしまう。

- ・視聴覚教材のインパクトによって、聖書のメッセージが飛んでしまう可能性がある。

等が考えられます。しかし、いずれにしても、子どもの発達段階から考えると、補助教材は必要不可欠な要素であらうと思います。

さて、いくつかの補助教材を紹介しましょう。

フラッシュカード： 牧羊者でも用意されており、皆さんもよく用いている教材です。利点としては、使用していきわかんと思ひますが、ストーリーを順序だてて追っていくには好ましい教材です。また、絵が苦手な人でも用いることができます。一方で、手がふさがることが少々難点です。しかし本来、フラッシュカードは紙芝居とは異なり、一時的に絵を見せて聞き手に印象を残すための

ものです。あくまでもストーリーが中心です。

フランネルグラフ … フランネルボード（ネルとよばれる布を張り付けた板）にネルで作った背景を張り付け、フィギアと呼ばれる人間や動物などを張り付けてメッセー지를語る教材です。フィギアを移動させたり取り外したり、また新しい背景やフィギアをつけることによって、メッセーじが展開されます。ストーリーの展開には有効な教材です。

ペープサート … 視覚教材の中では、手軽にできる教材です。同時に、動きもつけられる教材として用いることができます。しかし、両手がふさがるという点は欠点と言えるかもしれません。

パペット … 聞き手の幼子にとっては、非常にインパクトのある教材です。動きもつけることができますし、ストーリーも対話形式で進めることができます。掛け合いの妙という点では優れた教材です。しかし、自分で作るには技術が必要ですし、それなりにコストもかかります。

オブジェクト … 時計やバットといった、身の回りの物を用いて物語る方法です。導入の部分で用いるには良

い教材です。同時に知恵さえあればどのような物であっても工夫して用いることができます。

パワーポイント（OHP等、スクリーンに映し出す教材） … 最近では賛美の歌詞や聖書のことばをスクリーンに映し出している光景をよく見かけますが、時代の要請もあるのでしょうか、よく見かける教材の一つです。現代的で、画面も大きいので見やすさでは優れています。一方である程度の技術も必要です。一歩間違えば興ざめする、といったリスクもあります。

自分自身 … 何よりも、聞き手の目の前にいる自分自身が、最高の視覚教材です。生きた視覚教材として、これほどの教材はありません。声やジェスチャーはもとより、何気ない一つひとつのしぐさによって聞き手への伝わり方は変わります。著者の体験では、人は「なくてはクセ」。奉仕をしていた教会で、CS教師の訓練として教師の説教をビデオに撮って、様々な角度から検討し合ったことからその礎が築かれました。オススメです。

e. 例話の使い方

例話（イラストレーション）は、「説明」、「解明」と

いう意味があり、ラテン語では「窓から入る光線」という意味を持つ言葉です。スポルジョンは、「例話のない説教は、窓のない家のようなものである」と言ったそうです。ですから、ピッタリした例話は子どもの説教の理解を助け、それ自身が美しく光り輝くものです。

しかし、例話は、それ自体が目的ではありません。聞き手に理解を促し、適用、決断へと導く手段として重要な役割を果たすものです。聖書に、主ご自身も「たとえによらないでは何事も彼らに語られませんでした」（マタイ13・34）とあるとおりです。

では、例話の目的は何でしょう。

- ・「例えの話」とあるとおり、例話とは説教を絵で見せるように明らかにすることです。筋がのみこめない箇所であっても、効果的な例話は前後のつながりを明らかにします。

- ・説教を面白くするものです。説教は、前回も見たように「一つの主題」と「一つの目的」をもって語られます。ですから重要な部分が重複するものです。そこで、一定の調子での重複を避けるために例話が必要になり

ます。説教の単調さを避け、説教にメリハリをつけるためです。

次に、このような例話の探し方をご紹介します。

- ・観察することです。大自然から始まって、日常の私たちの生活の中で起こったさまざまな出来事に常に関心を持つことです。また、読書のような観察の仕方もあります。新聞をよく読むこと、テレビを見ながら例話を探すことも益があります。言ってみれば、日頃の心構えが説教を語るうえでは大切なのです。

- ・経験することです。自らの経験は、説教を語るうえで最大の武器になります。

- ・そして、最も大きな例話の宝庫は聖書そのものです。「聖書の最大の注解書は聖書である」という言葉があります。聖書の中の人物に重点をおいた例話、ある出来事に重点をおいた例話など、その引き出しは枚挙にいとまがありません。

V. 説教を語る

①信仰 … 信じる信仰 …

さて、このようにして説教ノートができました。実は、これで準備終了、ということにはなりません。最後に仕上げの準備として「信仰」―信じること―が挙げられます。実は、私自身、説教の準備は原稿で終わる！とCS教師時代は信じていました。原稿作成が終わると一件落着！そのような考えでいました。しかし、実は真の説教はここからです。実は、説教における原稿作成とは、自らのなすべきところを全うした、ということなのです。自らのこれまでの様々な取り組みの中の最善を主におささげした、ということにすぎません。あとは、私たちの信仰と、信仰に対する主の応答を待ち望む、という領域に入ります。実は、この領域こそが、わたしたちが主の奇跡を見せていただくクライマックスなのです。

a. 聴き手（子ども）の理解力を「信じる」こと

子どもたちは、表面上はどんなにふざけているように見えても福音を聴きたがっているということです。福音に飢え渴いているのです。その中で、十字架の愛を必要としているのです。

b. 聖霊の導きを「信じる」こと

神様は、教会に福音を委ねられました。教会に生きる私たちに福音を託されたのです。この不完全な教会に、福音宣教を託されたのです。そして、子どもたちに対する福音宣教をあなたに委ねられました。そこには、神が聖霊を通して私たちに語る力をお与えになることでしょう。その力を信じることです。

c. 福音の力を「信じる」こと

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である」（ローマ1・16）とあるように、子どもたちが福音の力を受け止める時、彼らの生涯は変えられます。福音力は「デユナミス」（ダイナマイト）の力

なのです。この「福音の力」に信頼しましょう。

d. 祈りの力を「信じる」こと

あなたはひとりではありません。子どもたちの前に立つ準備をしました。貴い時間をささげて準備をしてきたのです。そして何より祈り備えてきました。そしてそのあなたのために多くの祈りが積まれてきました。その「祈りの力」を信じることです。

②語り方について

そして、いよいよ言葉を通してみ言葉を語ります。語り方についての具体的なアドバイスとしては、次のようなものがあります。

a. 子どもたちの顔を見渡しましょう

前に立つたら、まず祈り心でゆっくりと全体を見渡します。子どもたちが今どんな顔をしているか、目はどこを向いているか、いろいろと周りを見回します。説教とは、独り言ではなく、子どもたちと、その子を取り囲む

天使たち、そして何よりも三位一体の神に対する宣言です。子どもたちと目と目を合わせて見つめていると、不思議に子どもは落ち着き静かになるものです。

b. 出だしが肝心

子どもたちは、期待をもって説教者の語る言葉等待っています。子どもたちへの説教は、最初の三分が肝心です。その三分で、子どもたちの心を説教者を通して語る言葉に引きつけるのです。子どもは正直です。その三分で説教のすべてが決まる、と言っても過言ではありません。はじめの導入部分は丸暗記するくらいの気持ちで語りたいものです。

c. 原稿から顔を上げて

「子どもたちの顔を見て語る」ことは、何も出だしに限ったことではありません。できれば最初から最後まで、この調子で語りたいものです。説教とは聴衆とのコミュニケーションであり、何よりもそれによって子どもたちは多くの反応を示してくれます。いろいろと工夫をしながら、子どもとのコミュニケーションを取ってみて下さ

い。また、そのためには説教原稿から顔を上げることにも必要です。多少、話が前後したり飛んだりしても、そこは語らせて下さる聖霊にゆだねて話をして下さい。説教原稿そのものを講壇に持っていくよりは、原稿をアウトラインにして持っていく方が良いでしょう。

d. 声を大切に

声の大きさやお話のスピードに気をつけましょう。特に、説教の佳境かきようの大切な部分はゆつくりと、抑揚よくようをつけて話をしてください。早口では何を話しているか分からなくなる場合があります。また、「間」を大切にしましょう。適度な「間」を入れることは、聴き手に考える時間を与えます。ゆつくりと、語りかけるように話しましょう。

e. 時間を大切に

語る状況にもよりますが、説教時間はおむね7〜15分程度で語りましょう。現代の特徴の一つは、「待つ」ことのできない時代であるということです。その顕著な例が子どもたちです。子どもは正直です。あまり長いと即

座に体の反応が返ってきます。

VI. 受け止められたメッセージ

実は、説教という行為はここで終わりではありません。説教を語るという行為は終わるのですが、説教者を通して語られた神の言葉が聴き手の耳に入り、頭と心で理解され、行動として移されるようになるまでが説教者の領域であると言って良いでしょう。その意味では、その後の私たちの考慮されるべき点は大別して2つあります。

①聴き手の子どもたちの魂への配慮

教会学校の説教という行為は「説教者個人の領域」であると同時に「説教者の属する共同体（教会）の領域」でもあります。教会学校教師によって語られた説教は、教会学校全体で伝え、また受け止めます。それぞれの発達段階は異なることでしようし、生活環境や性格、背景も千差万別でしょう。そのような中で子どもたちに福音を手渡したなら、それらが生活に適用されるよう、教会

学校全体で知恵を絞って考えるのです。

②説教の評価

説教は教会（学校）全体のわざであると同時に、もちろんそれは説教者個人のわざでもあります。語り終えたメッセージは取り消したり、語り直すことはできません。しかし、それらは次へ生かすことはできるのです。翌週の説教へ、また次回のその担当者の説教へと引き継ぐことができます。説教は神の言葉として語られます。ですから、それを評価することには抵抗があると考えられる方も少なくありません。しかし、説教を評価することは必要なことです。

a. まず、説教を評価するのは「説教者自身」です。自分の説教について、自らが気づいていることがあるはず。人は気づかなくとも、自分では気づいている部分をきちんと評価するのです。それらを書き留めてみることで。

b. 次に、「まわりの教師たち」に評価してもらうことも必要です。自分では気づかないことも、客観的な視

点で確認してもらうことができます。その評価を、まず受け止めることです。言い訳や反論ではなく、まずは受け止める心の姿勢を持つことが大切です。

c. そして何よりも、「子どもたち」の評価です。子どもたちは、あなたが語られたことをそのままに受け止めます。メッセージ中の彼らのしぐさや応答の中に、それらは反映されてきます。同時にそれは彼らの生き方の中にも反映されてきます。説教者や教会は、そこを見落としてはなりません。

d. もう一つ、それは「聖書」による評価です。これらの評価は何よりも、聖書に照らした評価でなければなりません。説教が終わって、自分は果たして聖書に即して説教が語れたかどうか吟味することも必要でしょう。

VII. 最後に

これらのことを、何一つ怠らずに一週間で行う、ということになれば、もう不可能に近いことかも知れません。しかし私たちは、「説教の準備は一週間でするものである

る」という間違った思い込みをまず捨てる必要があります。各教会学校においても、一ヶ月前には当番表ができあがっているでしょうし、「牧羊者」も最近は、遅くとも一ヶ月前にはお手許に届けられるようになりました。毎週説教をしている教師の方はほおられないでしょうし、何よりも説教の準備は楽しいものであるということに気づき、一度体験していただければ、説教のための準備はより良く進められていくと思います。

たとえば月に一回説教の順番がまわってくる、という人は、ひと月を4週に分割し、次のような計画はどうでしょうか。

(例) 一ヶ月計画の説教準備

・1週目…み言葉の黙想 ・2週目…聖書研究
・3週目…説教のための黙想 ・4週目…説教原稿作成
通勤電車の中や、家事の合間の時間を用いて、といった具合です。時間の用い方次第で、無理なく次の説教に備えることができるでしょう。

また、やはり一週間で備える、という人は、次のよう

な段取りはいかがでしょうか。

(例) 一週間計画の説教準備

・月曜日…火曜日…み言葉の黙想
・水曜日…木曜日…聖書研究(わからない箇所は各教会の祈祷会で牧師先生に聞いてみる)
・金曜日…説教のための黙想
・土曜日…説教原稿作成

説教への備えは息の長い働きです。信徒教師の方は日頃の仕事の合間に説教の備えをしなければならず、大変だと思います。しかし、子どもたちの変化を間近に見られるということは、大変光栄な、だいたい味ある働きであるとも言えます。また、「早く行きたいなら、一人で行きなさい。遠くへ行きたいなら、一緒に行きなさい」ということわざがあります。教会学校の働きは、「みんなで行く」教会全体の働きです。教会全体が、CS教師の説教のために覚えて祈り、そして、一緒に前進させていただきます。

皆さんのためにも、お祈りしております。

聖書 ヨシユア6・1～20

テーマ 神の方法による勝利

序論

(高橋頼男)

ヨルダンを渡りカナンに侵入したヨシユアとイスラエルの民の前に、エリコが立ち塞がっていました。カナンに侵入して約束の地を獲得していくためには、どうしてもまずエリコを攻略することが肝要でした。エリコは、古代からのオアシス都市であり、難攻不落の城壁を誇る町でした。一方、イスラエルと言えば、出エジプト以来四〇年、荒野を彷徨つてきた難民集団です。そのような民が、どうしてまともにエリコと戦い、これを攻略することができるでしょうか。改めてエリコを眼前に仰ぎ見たヨシユアは、どう戦ったらよいのか途方にくれました。しかし、この戦いは人間の戦いではなく、神が戦われる戦いです。したがって、人間の方法で勝利するのではなく、神の方法で勝利するのです。エリコは、神ご自身と神の方法による勝利によって初めて勝ち取られるのです。

一、主を軍勢の将として迎える(5・13～15)

エリコ攻略のために思案していたヨシユアの前に、いきなり抜き身の剣をもった一人の人が立ちました。ヨシユアは思

わず「あなたはわれわれを助けるのですか、それともわれわれの敵を助けるのですか」と問いかけました。その人は「いや、わたしは主の軍勢の将として今きたのだ」と言いました。ヨシユアはそのお方の前で地にひれ伏して礼拝し、足のくつを脱ぎました。そのお方こそイスラエルの主であるお方でした。そこで主はヨシユアに驚くべきエリコの攻略方法をお示しになったのです。

主を、軍勢の将としてお迎えし、ひれ伏して礼拝すること、その前に足から靴を脱ぎ、この戦いの主権をこのお方に完全に明け渡すことです。これが神の方法による勝利の第一歩です。

二、主の言葉を信じる(6・1～2)

主は、これから私はあなたに味方して、奇蹟を起こし、強大な町とエリコの王と大勇士を打ち負かそう、そして、町をあなたと民に与えようと言われたのではありません。わたしは、すでに「あなたの手に渡している」と言われたのです。すでに、戦いが勝利をもって完了したかのごとく宣言されました。何のしるしも兆候もなく、説明もその過程も語られず、ただそれだけのことを言われたのです。ヨシユアは、主のことばを「アーメン」と信じて受け入れました。それが信仰

です。

信仰とは、告げられたみことばを信じることです。しかしその信仰はたしかに「望んでいる事がらを確認し、まだ見えていない事実を確認すること」（ヘブル11・1）です。神の信仰は私たちへの説得や納得ではありません。人間の合意や可能性でもありません。それは、ただ神のことばを信じることです。しかし、そこに神の方法による勝利の第二步があります。

三、主のいさめに従う（6・3～20）

さらに、神の言葉を信じるということはお言葉ですからお従いますと、そのごく信じ従っていくことです（ルカ5・5）。しかし、主のお言葉に従うことは、ほんとうに難しいことでした。

主のご命令は、六日間エリコの町を一日に一回、回らなければならぬ。七人の祭司がラツパを吹き鳴らし、主の箱をかく者はそのあとに従わねばならない。七日目には七回、回らねばならない。そして、民が大声で呼ばわるとき、エリコの町の石垣は崩れ落ちる。その時、民は町に乗り込み、その町を占領することができる・・・というものでした。果たして、ただこれだけのことでこの巨大なエリコの町が崩れるの

だろうか。まことに信じがたいことです。何もせず、ただ町の周りを沈黙してひたすら歩くというのです。愚かで、たわごとのように思えてくる神の言葉です。沈黙の中にただひたすら歩きながら、「こんなことで大丈夫なのか、こんなことをしていいのだろうか」と、ヨシユアや民にふと疑念が湧いてきたかもしれません。しかし、とにもかくにも、ヨシユアと民は、この主の命令に従って、大真面目で主のお言葉を実行したのです。この戦いは「それは、戦闘態勢ではなく、宗教行事の行列だった。戦争自体が礼拝行為になっているのはエリコの戦い以外には見られない」（鍋谷堯爾）と指摘されるほどの異例の戦いでした。信じ従うということは、主のおことばが分からなくても、まるで愚かのように思えても、ただ神のおことばに信頼し、ひたすら聴き、そして従うことです。これこそ神の勝利の最終歩でした。その結果、ヨシユアと民は、驚くべき圧倒的な神の勝利を経験したのです。

結論

今日も、難しい問題や課題を抱えている私たちです。しかし、主に明け渡し、み言葉にひたすら聴き、お言葉に徹底して従うことこそ、神の方法による勝利の道と心得ましょう。ここに人知を超えた神の力あるご支配があるのです。

研究資料

(宮澤清志)

本章は、直接的には2章に続く物語として記述されている。

テキスト

1 エリコ ヨルダン川西岸、死海の北約10キロメートルあまりの場所にあった町。オリエント世界最古の要塞都市の一つとされている。**イスラエルの人々のゆえに** エリコの住民は、イスラエル軍の侵攻の前に震えおのいていた(2・9、11、5・1等参照)。

2 5節まで、主がヨシユアに対して出されたエリコ陥落のための具体的な指示が語られる。本節はその指示の要約である。主 5・13～15に登場する、主の軍勢の将と考えられる。**見よ、わたしは……わたししている** エリコに対する勝利は、神の賜物であり、この勝利が神の意志によつて既にすでに達成されたものであることをあらわしている。特に、**わたししている**という言葉は完了形であり、そのことを端的に物語っている。実際の占領は、神の側の既成の事実がこの地上において展開され、遂行されるにすぎないのである(天的既決定の地的追決定)。

4 七人、七日目、七度 この「七」という数字は、古代イ

スラエルでは聖なる数であり、また「完全数」であるとも言われている。特に、宗教的祭儀には七という数字は重要である(レビ4・6、8・11、16・14等)。**雄羊の角のラッパ** 通常、戦争(歴代下13・13以下)と礼拝式(民数記10・1～10、詩篇47・5)において用いられた。

これまでの節からもわかるように、エリコの城壁の崩落の出来事は、イスラエルの民の軍事的行為ではなく、宗教的行為であるということである。と同時にこの行進は、信仰者の信仰の歩みの行進であるとも見ることができる。

6～7 前節までの主の指示に従つて、ヨシユアが命令を下す。**契約の箱** 9/30の研究資料(3・3)を参照。

8～11 主の指示(2～5)に従つて下されたヨシユアの命令(6～7)は、その民によつて遂行された。この箇所の詳細は、すでに前の箇所によつて確認されている。ここで再びその詳細を記す。

まず、**武装した者**(4・13、6・7、9)が存在していたことから、これらの一連の行進は宗教的行為であると同時にやはり軍事的な行進という要素も加わっている。それは、主の軍勢の将(5・15)の存在からも明らかである。しかし、本日の聖書箇所全体の文脈から見ると、やはり第一義的

にはこれら一連の行動は宗教的行為である。なお、この**武装した者**〔ハルツ〕は、戦闘の備えができている者、という意味を持ち、スポーツにおける前衛といった意味合いの言葉である。

次に、**雄羊の角のラツパ**（4、8、他）は、聖書では民に戦いに対する備えをするようにとの準備や、聖なる行進のために用いられている（民数記10・9他）。しかしここではこのような意味以外にも、主の臨在を示し、また主の解放を示す意味合いもあった。

そして、**町を巡る**（4、7、11、他）という言葉は詩篇48・12にも用いられており、シオン（エルサレム）を巡る巡礼者の巡礼の姿を示している。

しかし、この箇所がその前後の箇所と決定的に異なる点は、「**あなたがたは呼ばわってほらない。…**」（10）というくだりである。イスラエルの民は、この戦いが主の戦いであることを徹底的に知る必要があった。主の戦いに人間のときの声は不要である。

12～14 基本的には前節までの一日目の行動と同じである。

15～16 主がヨシユアに命じられた7日目の指令（4～5）が実行される時が来た。

17～19 **滅ぼす**（聖絶する、滅ぼし尽くす） 旧約聖書、特

に申命記とヨシユア記では重要な思想のひとつである。イスラエルでは、戦争は宗教的行為である。それゆえ敵はヘーレム、主にささげられるべきものとして滅ぼし尽くさなければならぬものとされていた。7章に登場するアカンは、この滅ぼし尽くすべきものを惜しんで横領し、一族もろとも滅ぼし尽くされた。戦争が聖なる戦争であるため、戦争に加わる者も聖なる者とされた。カナンの町々を攻略する者は、そこに住む人々を聖絶しなければならない（申命記20・16～17）。なぜならば、彼らの偶像礼拝は不浄であり、それを除くことによって、主の聖さは保たれるからである。この点がおろそかにされるとイスラエルの民は偶像礼拝に惑わされ、主の怒りを招くことになる。イスラエルが聖なる民であり続けるためには、異教の偶像礼拝から切り離されていなければならぬのである。そうでなければ、アカンのように、自らが滅ぼされるべき者とされることになるのである（18）。ただし、金、銀、青銅、鉄およびそれらで造った器は、聖別されたものであって、主の宮に携え入れなければならない（19）。

参考図書 リチャード・S・ヘス『ティンデル聖書注解 ヨシユア記』（いのちのことば社）他

聖書

ヨシユア6・1～20

タイトル
暗唱聖句

勝てるよ！神様の方法でなら
そうすれば、町の周囲の石がきは、く
ずれ落ち、民はみなただちに進んで、
攻め上ることができろ。

ヨシユア6・5

目標

人間的な方法でなく、神の方法によつ
て勝利を得る。

導入

(和田 治)

「たつ、たつ、大変だ〜！」「なんだなんだ、どうしたつて
いうんだ？」「えらいことがおこったんだ：ヨルダン川の水が
干上がつて、イスラエルのやつらがぞろぞろと渡ってきたんだ。
もうすぐやつてくるぞ！」「何だつて？」エリコの町の人々は、
もうパニック！先週、ヨシユアが率いるイスラエルの民が、神
様の奇跡の力でせき止められたヨルダン川を、歩いて渡ったこ
とを学びましたよね。その川からそう遠くはない、最初の町、
それがエリコです。その町の人たちは、イスラエルの民を恐れ、
門を固く閉ざしていました。「でも大丈夫だ。俺たちには、こ
の頑丈な石垣がある。いくらやつたでも、この石垣を打ち崩し

て町に入つてはこれまい！」そうです、エリコの町はものすく
く頑丈な壁に囲まれた、強い町だったんですね。

ところが、神様はヨシユアにおっしゃったのです。「あなた
たちはもう勝つたも同然だ。すでにこの町はあなたたちにわた
している！」さあ、今日は、神様がイスラエルの民に、どんな
方法で勝利を与えてくださったかを見てみましょう。

不忠議な御命令

神様はヨシユアに、こうお命じになりました。「あなたがた
はみな、町のまわりを一度回りなさい。七人の祭司たちは、雄
羊の角のラツパをもつて、神の箱の前を進むのだ。六日の間そ
のようにしなければならぬ。少しも声を出してはならないぞ。
そして七日目には七度、町の周りを回りなさい。そうしたら、
祭司たちは雄羊の角のラツパを長く吹き鳴らすのだ。それが聞
こえたら、民はみな大声で叫びなさい。そうすれば、町の周囲
の石がきは、くずれ落ち、民はみなただちに進んで、町を攻め
上ることができろ！」あれれ？ただだまつて町の周りを歩くだ
け？そんなことで、とてつもなく頑丈なこの町を攻め取ること
ができるの？「冗談じゃない！そんなことで勝てるはずがない
よ〜」なんて、つぶやきが聞こえてきそうですね。皆さんな
らどう思いますか？神様がお命じになった通りにするでしょう

か？

神様に従ったヨシユアたち

「おやおや、いつたいあいつらは何をやってんだ？」エリコの人々が目にしたイスラエルの民は、なんて薄気味悪いことをしているんでしょう！ラツパを吹き鳴らしながら、誰も声を上げず、ひたすら町の周りを歩き、一周回るとまた戻っていきます。次の日も、またその次の日も。「やつら、ばかじゃないのか？」「あんなことをして、俺たちに勝てるでも思っているのか？」そんな声も聞こえてきます。でもヨシユアたちは、ただただ神様の御命令に従ったのです。そして、七日目には、きつちり七回、この町の周りを歩いて回ったのです。

神様による勝利

さあ、ついにこの時が来ました。祭司たちが改めてラツパを吹き鳴らし、それを合図にイスラエルの民は大声を上げたのです。と、その時です！「がたがたがた！どどどどどどしゅんがしゅんがしゅん！」なんと、押したり揺らしたりしたのでもなく、ダイナマイトで爆発させたのでもないのに、エリコのあの頑丈な石垣がいつきに崩れ落ちたではありませんか！「うわあ！助けてくれ！」エリコの町は裸同然です。イスラエルの民は徹底的に、エリコを攻め取りました。大勝利です！

どうして勝ったの？

イスラエルの民は、どうやってエリコの町を攻め取ることができたか、その方法を自分たちで、考えたのでしょうか？いえ。「すでにこの町はあなたたちにわたしている」とおっしゃる神様のお言葉を信じ、ひたすら神様の方法に従ったのです。それは、人間の目から見れば不思議で、その通りにしたら勝つことができそうにはとても思えない方法でした。でも、それが神様の方法なのです。そして神様の方法以上に素晴らしい確かなものは絶対にありません！ヨシユアたちはその神様の方法に従ったからこそ勝ったのです。

まとめ

皆さんは神様を信じ、神様の方法が一番良いって心から思っているでしょうか。聖書のみ言葉は時には、「こんなことにそのまま従うなんて、ばかばかしくってできないよ」とか、「み言葉に従いたいとは思うけど、恥ずかしくってできないよ……」と思うこともありますよね。でも、神様のみ言葉、神様が示してくださっている方法は、どんなときにもベストです。お祈りの中で神様の方法を求め、聖書のみ言葉にまっすぐに従おうではありませんか。そこにこそ、勝利の力があるのです！

♪主のパワー♪

(ふくいんこどもさんびか2)

36)

聖書 士師6・7・16 テーマ 勇士として立つ

序論

(高橋頼男)

イスラエルがカナンに侵入してから王制が出来るまでの約二百年の期間が、士師記の時代です。当時、各部族はゆるやかな連合制の中でそれぞれ独立したあり方を取りました。そのため強力な外敵の攻撃に対しては弱く、しばしば侵略を受けました。そして、それは彼らが偶像礼拝を行って靈的に墮落したときに起こりました。圧迫された民が神に叫び求めた時、神は「士師」と呼ばれる解放者を起こし、イスラエルを救い出されました。士師記には十二人の士師が出てきますが、ギデオンは五番目の士師として登場します。

ギデオンの時代、イスラエルを圧迫したのはミデアン人とアマレク人でした。彼らは遊牧民であり、毎年収穫の時期になると、いなごの襲来のように大挙してやって来て、民を襲って地の産物を根こそぎ奪い、ことごとく略奪してしまいました。このようなことが七年も続き、イスラエルは全く疲弊し弱くなっていました。民はこらえきれず主に叫び求めます。このような状況の中で神が救済者、解放者として選ばれ

たのがギデオンです。

一、臆病者の士師(11~13)

主の使いが来てヨアシの子ギデオンに呼びかけられた時、彼はミデアン人の目を避けて酒ぶねの中で麦を打っていました。主の使いは「大勇士よ、主はあなたと共におられます」と言いましたが、この言葉は、ギデオンにとっては何か悪い冗談か皮肉のように聞こえました。彼は、自分はマナセの内で一番小さい氏族であり、自分も弱く父の家でも若いものであることを、くどくどと言っています。そんな自分をなぜ「勇士」と呼ばれ、「あなたはこのあなたの力をもって行つて、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出さない」と言われるのか、彼は本当にとまどつてしまいました。

二、臆病者を用いられる神(14)

この時のギデオンは、全く臆病で消極的な人間でした。しかし、主の使いはそのようなギデオンをあくまでも「大勇士」と呼ばれます。

神の戦いは神の方法でなされ、神はご自身の栄光が現される方法を用いられます。神は、自信満々の人間、知恵と能力のある者や、自分の力を誇る者を用いられることはありません。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない者をあえて選び、

召し、用いられるお方です。「これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」(ゼカリヤ4・6)。弱く、小さく、力のない臆病者のギデオンこそ、イスラエルを救うための神の選びの器でした(参考 Iコリント1・26〜31)。

私たちも、強気の言葉や態度とはうらはらに、本当の自分の姿を見せられ、無力感や不信、自己の醜さに打ちのめされることがあります。私たちの教会も日本のキリスト教会もまことに小さく、力の無いものであることを思われます。異教や異端ばかりが跋扈し、この世の勢力や組織がすべてを支配しているかのような現実から、キリスト教会は隠れて存在し、かろうじて日々の生活と働きを継続しているように感じてしまうのです。私たちの祈りも信仰も臆病なものになっていないでしょうか。何か言われると、自分に能力がないこと、小さく弱いことを言い訳にしていけないでしょうか。しかし、いつもそこに留まって、神のお言葉と召しに従わないことこそ、私たちの最大の問題なのです。今一度、本気で主を求め、全面降伏・全面信頼し、上からの新しい注ぎを受けることではないでしょうか。

三、臆病者を大勇士に変える神(14〜16)

ギデオンを選び、救済者として召された神は、臆病者を大

勇士に変える力を持つておられます。主が選び、召し、共にいてくださり、つかわしてくださるのです。「わたしがあなたと共にいる」(「わたしがあなたをつかわす」と主は繰り返し語られます。もし、そうならば、これに勝る力、勇氣、祝福はありません)。

「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ(訳せば、ペテロ)と呼ぶことにする」(ヨハネ1・42)。直情的で不安定、欠点の多いシモンにイエスは目を留め、そのようなあなたをわたしは「ペテロ」(不動の大岩) と言うようになりました。生まれつきのシモンと、後の大使徒ペテロとのギャップはとても大きなものです。しかし、その狭間を埋めて実質を持つ「ペテロ」としてくださるのは、イエス様なのです。

私たちも今日、主が共におられるという事実を受け入れ、主が、弱く臆しやすい私たちを造り変えて下さることを信じ、臆病者から勇士に変えられましょう。

結論

弱いところを強くされ、疑いを確信に変えていた、たきましよう。そして大胆な信仰に立つて神に従い、神の方法によつて圧倒的多数に対しても完全に勝利する者とされましよう。

研究資料

(宮澤清志)

ギデオンは、士師記に登場する12人の士師(さばきづかき)の中では、来週に扱うサムソンと並んで最も有名であり、また記述も多い士師である(6〜9章)。説教者は、まずはギデオンの物語を一読して、説教に臨みたい。

テキスト

7 ミデヤンびと アブラハムとケトラとの間に生まれた第4子(創世記25・2)。その後、この民族は聖書に度々登場するが(創37・25〜、民数記22、25章)、一旦はモーセによって滅ぼされる(民数記31・1〜20)。ミデヤンびとの最大の特徴は、彼らのバアル礼拝である。

8 預言者(ヘイ・シシュ・ナーヴィ 直訳すると「預言者であるひとりの男性(人間)」)。士師(さばきづかき)の時代に預言者が登場することは珍しいことであり、士師記においてはイスラエルが主に呼ばわると、その時点で士師が遣わされる(3・9、15)。しかしここではその前段階として預言者が遣わされる。この預言者の任務はイスラエルの民にその罪を示すことと、彼らに悔い改めを命じることであった(10)。

11 主の使 この言葉は、旧約の神顕現(けんげん)の重要な個所によく

用いられている言葉である(創16・7以下、22・11、15、出エジプト3・2、民22・22、列王上19・7、イザヤ37・36、ゼカリヤ1・11〜12他)。また士師記においてもこの言葉はしばしば登場する(2・4、5・23、13章)。もちろんギデオンの物語だけでもしばしばみられる(11、12、21、22節)。これらの箇所を見ると、この主の使は神と人間の間を仲介する役割を果たしているのであろうと考えられるが、それが預言者のな役割であったか(ハガイ1・13)、それとも祭司的な役割であったか(ハガイ2・7)は明らかではない。この、主の使について、受肉前のイエス・キリストであると考ええる立場もある。ギデオンはこの使を、はじめ普通の人にとらえたが、この使が見えなくなつてから、この方が主の使であることを知つた(21、22)。アビエゼルびとヨアシ アビエゼルびとは、マナセの一族(15節。またヨシユア17・2参照)。アビエゼルとは「父(神)は助けである」という意味である。またヨアシは「ヤーウエは与えたもう」という意味である。またヨアラ エスドラエロン平原の中部に位置する。

テレビンの木 新改訳聖書では「樅の木」。伝統的に聖なる木であると考え、神の託宣が与えられるとされる木であった(創世記18・1以下)。時にヨアシの子ギデオンはミデヤンび

との目を避けるために酒ぶねの中で麦を打っていた ミデヤン人は、イスラエル人が苦勞して栽培・収穫した農作物を狙って、その収穫期にイスラエルを襲った。そのミデヤンの侵略から逃れるために、ギデオンは酒ぶねの中で小麦を打っていたようである。酒ぶねは、岩床に掘り起こされた穴で、ギデオンはその穴の中に隠れていた。

12 大勇士(ハ)ギッボール ハイル ギッボールもハイルもともに「勇者」という意味。そこで、「大勇士」となったのであろう。 **主はあなたと共におられます** 主の臨在の約束。先週見たヨシユアにも(ヨシユア1・5、9)、またアサ王にも(歴代誌下15・2) 臨んだ。

13 前節の主の使いの言葉に対するギデオンの反応は、至極当然のことのように思われる。 主は彼らを見捨てたのではないが、また主の力あるわざは昔のものであって、現在のことではないのではないか、という不満である。この不満は、明らかに同時代の人々も抱いていた不満であらう。

14 あなたの力 主は「わたしの力」とはおっしゃらず、「(わたしが与えた) あなたの力」と仰せになった。主の力は既にギデオンに与えられていたのである。その上で、主はギデオンを遣わそうとされたのである。同時に前節のギデオ

の問いに対して主は **あなたは…救い出さない。わたしがあなたをつかわす** と語られた。前節の問いを解く鍵はギデオンにあるのである。同時にこの言葉は主の召命の確認の言葉でもある。

15 主よ 13節の「君よ」という呼びかけから明らかに変化している。「わたしの主よ」(新共同訳) **最も小さい者** 一番若い者(新改訳)という意味。自分の家の地位の低さや年齢の若さなどの理由によつて主の申し出を断る姿は、モーセ(出エジプト3・11、4・10)、サウル(サムエル上9・21)、エレミヤ(エレミヤ1・6)にも見られる。

16 わたしがあなたと共にある 12節の主の臨在の約束の再確認。この言葉は、14節の言葉と共に、主が「派遣の主」であると同時に「臨在の主」であることを表す。この言葉はマタイ28・18、20にも約束されている言葉であり、古今東西を問わず主の弟子たちに与えられている、これ以上ない約束である。

参考図書 アーサー・E・カンダル、レオン・モリス共著『ティンデル聖書注解 士師記、ルツ記』(いのちのことば社) 他

聖書

士師6・7～16

タイトル

勇士として立つ

暗唱聖句

大勇士よ、主はあなたと共におられます。
士師6・12

目標

どんな人をも働きに用いようとしてくださる神の招きにお応えする。

導入

(和田 治)

「どうせ僕なんて、力も強くないし、勇気もない弱虫なんだよな」、「どうせ私なんて、神様のお役にたてるような力なんかちつともない、ダメな子なのよね」皆さんの中に、そんなふうに思っている人はいますか？実は、今日のお話でスポットが当たるのは、まさしく、「どうせ弱くなんて…」って思っているタイプの人なんです。その名はギデオン。彼を見てみると、神様は、弱い人こそお用いになるのだ、っていうことがよくわかりますよ！

弱虫ギデオン

イスラエルが王様によって治められるようになるまでの二百年ほどの間のことが書かれているのが、この士師記です。士師というのは「さばきつかさ」とも言って、人々を救うために神様がお用いになったリーダーなのです。十二人の士師のうち五番目に立

てられたのがギデオンでした。当時、ミデヤン人は、イスラエル人が苦勞して育てた農作物を狙って、襲いかかり、奪っていくのでした。でもギデオンは、敵であるミデアン人に戦いを挑むどころか、彼らの目を避けて酒ぶねの中で、こそこそびくびく、麦を打っていたのです。あれれ、怖がりで弱虫ですね。

ある日、主の使いがギデオンに言いました。「大勇士よ、主はあなたと共におられます。イスラエルを救い出さない！」勇士っていうのは、勇気のある人という意味です。「神様、とんでもありません。イスラエルを救うなんて、とてもできません。私の家は、マナセ族の中でも一番弱いし、それに私は、家で一番年下なんです」。そんな自分をなぜ「大勇士」と呼ばれ、「あなたはあなたのこの力をもって行つて、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出さない」と言われるのか、さっぱりわかりません。彼は本当にとまどつてしまいました。

弱虫をお用いになる神様

「ギデオン…そんな弱気なことを言うとは情けない、がっかりだ。もうお前なんかには頼まない！」、主の使いはそうは言いませんでした。だって、主なる神様は、ギデオンの弱さをよくく知っておられた上で、彼をお選びになったんですから。「あなたは、わたしが与えたあなたの力をもって行きなさい。わ

たしがあなたをつかわすのだ！」

「僕に任せてくれ！立派にやって見せる！」、「私なら大丈夫！自信があるの。神様の力なんかありません！」なくんていう自信満々の人間を、神様はお用いにはならないのです。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない人をあえて選び、お用いになるのです。

なぜって？それはね、人は自分の弱さを知っていると、「神様、どうかお助け下さい！」って、神様に頼るでしょう！すると、神様はその人を自由に用いて、ご自身のわざを進めることができるのです。やがて、ギデオンの軍隊は、ミデアン人に比べるとあまりにも数が少なかったのに、見事に敵をやっつけたのです。もちろん、神様の力によって！

恐れるというは！

ギデオンが恐れて尻込みしているとき、主は彼にこうおっしゃいました。「わたしはあなたと共にいる！だから、あなたはひとり撃つようにミデアンびとを撃つことができる！」ギデオンのように、私たちも、弱くて小さくて、何もできないかもしれせん。でも、忘れてはなりません。私たちには神様がついてるんです！だから、恐れなくていいんです。神様はどんな人でもそのお働きのために用いることができるお方なのです！

例話

マレーシアに遣わされていた二人の宣教師が、ちよつと離れた村の銀行まで、送金されてきたお金を受け取りに行きました。自分たちの村に戻る途中で、日が暮れ、仕方なしに二人は野宿します。心を合わせて神様にお祈りし、岩陰で横になって眠りにつきました。数週間して、一人の男が宣教師の病院に治療にやってきました。彼は宣教師のお医者さんの顔を見ながら、こう言うのです。

「先生、あなたは丘の岩陰で夜中に寝ていたでしょう。月が明るい夜でした。わしら数人で、銀行から出た先生をじーつと後ろからつけ、夜になるのを待っていたんです。知らなかったでしょう？」彼は照れ笑いをしながら、告白しました。「いやー、あそこまで来ておいて、盗めなかった。何しろ、先生たち二人は、兵隊にガードされていたからな。あそこまで来て、結局あきらめたよ」。「兵隊？いや、私たちは二人つきりだったよ」。「何を言いますか。兵隊は二人でしたよ。わしらみんな確認しましたから。あきらめて帰りました」。

ギデオンとも、この宣教師たちとも共におられた神様は、私たちともいつでも共におられ、お用いくださいます。恐れず、神様を信頼して進もう！

♪雄々しくあれ♪

(新聖歌 486)

聖書 士師16・4・6、15・22 テーマ 聖別による力

序論

(高橋頼男)

最後の士師サムソンは、主の御使いによつて、生まれたときからナジル人として聖別され、ナジル人として両親によつて育てられた人物です。その聖別によつて彼に与えられた賜物は、特別な力でした。サムソンはその並外れた力を揮つて二〇年間、ペリシテ人の支配からイスラエルを救いました。

サムソンの生涯は奇想天外で、大変興味深いものです。特別な使命と賜物を与えられた主人公の生涯の物語は、奔放な恋愛、人間の欲望、裏切りや駆け引き等々が満載で、ついには悲劇の英雄としての最後を迎えるという、涙を誘うドラマ仕立てです。同時に、彼の人物、人格は、はなはだ不完全であり、子供のような幼児性を持ち、情欲に流されて自己統制がとれない肉的人間そのものであり、周囲の人々をかき回しています。そのようなサムソンにたびたび聖霊が臨んで感動を与え、神の力を揮つて解放者としてのめざましい働きをするのです。

神様がなぜこのようなサムソンを選ばれ神の業のために用

いられたのか、正直戸惑います。聖霊の賜物を用いて大きな神の働きをする器が、必ずしも直ちに神の人の品性を併せ持つとはかぎらないということを教えているのでしょうか。

一、聖別による力

彼は生まれながらの神へのナジル人でした。ナジル人とは、神に聖別された者という意味です。ナジル人は、ブドウ酒や強い酒を飲まず、頭にかみそりをあてることをしません。この世から聖別され、神の霊に満たされることによつて特別な働きをすることができたのです。

私たちにとつてナジル人の聖別とは、ナジル人の外側のかたちをまねることではありません。キリストの十字架と復活による贖いにあずかり、罪の赦しときよめをいただき、聖霊によつて自分を主にささげてキリストのものとされ、全き聖別をいただきたい者です。だから、いよいよ主のために身と心をささげて聖霊によつて生きるのです。そこに主は、恵みと力を注いで主の証人として用いてくださいます。決して髪の毛をそり落すことがないよう、主と主の御霊から離れることのないよう、慎重な生活を心がけていなければなりません。

二、聖別を失う悲劇 (20)

残念なことに、サムソンは自分がナジル人としての特別な

召しと選んを受け、にあまりにも無頓着でした。そして、自分の肉欲のおもむくままに行動します。とりわけ、異性に対して肉欲の働くまま勝手な行動に走ってしまいました。愛に溺れたサムソンは、ペリシテの女性デリラに巧妙に口説かれるまま、彼女のたくらみにも気づかず、力の源の秘密をついに打ち明けてしまいます。デリラの膝の上で眠り続けてしまったサムソンはとうとう髪の毛をそりとされてしまいました。眠りからさめて、今度も前のようにからだをひとゆすりしてやろうと言った彼は、主が自分から去られたことを知らなかったのです。何という悲劇でしょう。敵の前に、主が去られたことを知らずに、自分には力があると思いつているサムソンはあまりにも惨めです。

主の僕は主の御霊から離れて何の力もありません。どんな賜物を与えられた人でも、かつてどんな大きな働きを担った器でも、信徒でも牧師や伝道者でも、「わたしから離れては、何一つできない！」(ヨハネ15・5)のです。この厳肅な霊的現実、恐れおののくものであるべきです。

三、聖別の回復(22)

力を失ったサムソンは、ついにペリシテ人に捕えられ、両目をえぐり出され、なぶりものにされました。彼はガザの町

に引き行かれ、牢獄の中で鎖につながれて、臼をひかされました。彼は、今までの自分を振り返ってどんなに自分の行動を悔いたことでしょう。しかし、〈その髪の毛はそりとされた後、ふたたび伸び始めた〉のです。神は彼の聖別を回復してくださいました。サムソンは、獄屋で悔い改めの日々を過ごしました。もう一度、神に祈り、神にすがり、神に立ち返る時が与えられたのです。そして、サムソンの神の毛が再び伸びた時、彼は再び神の力に満たされました。タゴンの祭りに引き出されたサムソンは、劇場の柱によりかかってこれを倒しました。彼の最後の戦いにおいて、彼はそれまで以上の敵を打ち倒したのです。主は、今も「悔い改め」という素晴らしい恵みを備えていてくださいます。神は、悔い砕かれた心をかろしめられません。砕かれ、徹底して悔い改めた魂に、新しい力と命を満たしてください。正しい霊、聖なる霊、自由の霊を注いでくださいます(詩篇51・10、12)。

結論

聖別された者として主にささげ、主に結びつくことにより、絶えず新しい力を受けましょう。

研究資料

(宮澤清志)

サムソンの物語は、ギデオン同様、士師記の中でも人々に愛され、よく読まれてきた箇所である。であるから説教においてはひとつの厄介な問題が起こりうる。それは「思いこみ」である。説教者はこれまでの知識や親しみを一旦脇に置いて、テキストに向き合うべきであり、白紙の状態で聖書に向かい合いたいものである。また先週同様、サムソンの物語（13～16章）にはすべて目を通してから、当該箇所に取り組みたい。

テキスト

4～5 デリラ 「思わせぶりをする」という意味の名。ペリシテ人であった。しかし、この名の由来だけを見てデリラに対する偏見を抱くのは早計である。なぜなら今回のサムソンとデリラの物語の背後には、当時その地方に勢力を持っていたペリシテの君たちの策略があったからである（後述）。**ペリシテびとの君たち** ペリシテ人には5人の領主がいた（サムエル上6・4）と考えられるから、ここでも5人いたのであろう。すると、デリラへの報酬としてのおの銀一一〇〇枚とすると、全部で五五〇〇枚ということになる。この学を今日の貨幣価値に換算すると、注解者によって多少の幅はあ

るものの、おおよそ250～300万円くらいの額とされている。かなりの高額である。**説きすすめて** 「言いくるめて」（新共同訳）。この言葉にペリシテの領主たちの策略がうかがえる。

15～22 サムソンがその力の秘密を打ち明けた経緯が記されている。

15 あなたの心がわたしを離れている 直訳すると「あなたの心はわたしとともにならない」となる。これまでのデリラの言葉（10、13）とは明らかに異なる言葉。デリラの焦りと怒りが透けて見える。**三度も** 一度目（7～9）、二度目（10～12）、三度目（13～14）。

16 毎日 どのくらいの日数が経過したかは明らかではないが、かなりの日数が経過したと考えられる。その間、毎日前節の殺し文句をもって責め立てられたサムソンは、死ぬほど悩んだ。

17 ここに人間の弱さを見ることができると。サムソンは既に同じ過ちをティムナの女の一件でもしていた（士師記14・16～18）。この時も、サムソンは思わずその秘密を打ち明けてしまったのである。前の過ちを繰り返さないように注意していても、同じ過ちを繰り返してしまったのである。**ナジルびと** 「聖別された者」という意味を持つ。イスラエル人の中

で、特別な宗教儀式（誓願^{ちかがん}）を守って献身し、ヤハウエに対する信仰を表明した人々を指す。それは一時的献身の場合もあれば、生涯にわたる献身の場合もある。サムソンは後者である。具体的な守るべき律法は、民数記6章に記述されている。

かみそりを当てたことがありません ナジル人が守るべき律法の一つ。古代において「毛髪」は不思議な力の宿るところとされた。毛髪の成長力と関連があるのかも知れない。髪を失うことは、力の喪失を意味していた。しかし、サムソンの力の源が毛髪にあるのではないというまでもない。

また彼の肉体にあるのではない。彼がその毛髪を剃ることを許したことは、彼がナジル人としての誓願を破り、神との関係を絶つたことになるのである。その結果、主はサムソンを離れた（20）。**ほかの人** 直訳は「人間（アダム）のひとり」

18 デリラは、サムソンが今度こそ真実を打ち明けたことを直感によって知ったのであろう。彼女はペリシテの領主たちに上ってくるようにと呼んだ。そのとき領主たちは銀をもつて上ってきた。すなわちデリラとペリシテの領主たちとの間で約束されていた銀一〇〇枚のことであらう（5）。

19 彼を苦しめ始めた サムソンが寝ている間に両手を縛り、7房に分けてあった髪をことごとく切り落とした後に、侮辱

し始めたのであろう。

20 彼は主が自分を去られたことを知らなかった 民数記14・42以下、ヨシユア7・12（アカン）、サムエル上16・14、18・12、28・15（以上サウル）等、この言葉はしばしば登場するが、非常に厳しい言葉である。同時にここにおいても、サムソンの力の源がその毛髪にあるのではなく、臨在される主ご自身にあることが明示されている。

21 両眼をえぐり サムソンを捕らえたペリシテ人たちは、即座に彼を殺すのではなく、まずなぶりものにして楽しもうという意図がうかがえる。**ガザ** 地中海沿岸にある、ペリシテの5つの都市国家の一つ。**うすをひいていた** 通常奴隸のする仕事であり、やはりサムソンをなぶり者にしようという意図がある。

22 その髪は毛はそり落された後、ふたたび伸び始めた この間の時間の経過がどれくらいであるか分からないが、この間は、サムソンにとっては悔い改めと神との交わりと回復の時として必要な時間であった。この後続くペリシテとの最終決戦（23〜31）の背景には、この期間の主との交わりの回復が必須であった。

参考図書 10月14日分と同じ。

聖書

士師16・4〜6、15〜22

タイトル

あなたも私もナジルびと

暗唱聖句

わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。士師16・17

目標

罪から聖別されて、力強い信仰者生涯を送る。

導入

(和田 治)

みんな、「重量挙げ（ウェイトリフティング）」って知ってる？（実際に動作で見せてあげてください。）世界記録はアテネオリンピックの263キロなんだって。男の人4人分くらいの重さを一気に持ち上げるなんて、すごい力持ちですよ！でも、まさに段違いのすごい力持ちが、聖書の中に出てきます。十二人の士師の最後の一人、「サムソン」です。その力は、ペリシテ人の町の門を、二本の柱ごと引っこ抜いて、高い山の上まで運んでいったほどでした！またある時は、ロバのあごの骨一つで、一千人ものペリシテ人を打ち倒したのです。信じられない！今日は、世界一の力持ち、サムソンに注目！

ナジルびと、サムソン

今日の暗唱聖句を覚えてよね。もう一度言ってみよう。：「ナ

ジルびと」ってなんでしょう？神様のものとして聖く生きるように選ばれた人のことです。「生まれた時から神にささげられたナジル人」だったサムソンは、御使いに命じられ、一切ぶどう酒を飲まず、髪の毛を剃り落すことをしませんでした。その長い髪の毛は、神様がサムソンに、ものすごい力をお与えになっているしるしでもありました。

その頃、イスラエルの民はペリシテ人から苦しめられていました。サムソンは神様の霊の力によって、ペリシテ人を次々と倒していきました。ところがサムソンの気持ちは、まっすぐ神様に向くのではなく、なんと、女の人の方に向いていたのです。

ばうしちやダメなのに・・・！

ある時、サムソンはデリラという女の人に恋をしました。そこでペリシテ人たちが、デリラに言いました。「やつ力の秘密を探れ。どうしたらあいつを鎖で縛り上げることができるか、ぜひ知りたいのだ。お礼のお金はたんまり用意しているぜ」。

デリラは早速、サムソンにおねだりします。「ねえあなた、どうしてそんなに強いのか？私に教えてちょうだい」。でも、サムソンはデリラに本当のことを言いませんでした。秘密をばらしてしまえば、神様に背くことになるからです。三度、デリラからねだられました。秘密を守り通しました。

でも、デリラはあきらめません。「サムソン！よくも、愛してるなんておっしゃれるわね。ちっとも私を信じてくださらないくせに。今度こそ力の秘密を教えてちょうだい！ね、お願い！」毎日毎日、デリラはサムソンに同じことを言っていて迫り続けました。とうとう根負けした彼は、デリラに秘密をばらしてしまったのです。「実は、わたしの頭にはかみそりを当てたことがないんだ。それが力の秘密さ。生れた時から神にささげられたナジルびとだからね」。

悔い改めたサムソン

さあ、大変！デリラの知らせを受けたペリシテ人たちは、サムソンを捕まえにやってきました。「なあに、いつもの調子で片づけてやるぜっ！」彼は神様が自分から去られたことに、気づいていなかったのです…。力を失ったサムソンは、ついにペリシテ人に捕えられ、両目をえぐり出されてしまいました。そして、ガザの町に連れて行かれ、牢獄の中で鎖につながれて、臼をひかされたのです。

その牢獄は、サムソンにとって、悔い改めの場所になりました。神様との約束を破ったこと、ナジル人なのに聖い生き方から大きく脱線してしまったこと…。神様は悔い改めたサムソンに、もう一度力を注いでくださいました。頭の毛がだんだん伸びていったのです。

ペリシテ人の神、ダゴンの祭りに引き出されたサムソンは、劇場の柱を抱えて身をかがめました。すると建物が崩れ、その下敷きで、たくさんの敵を倒しながら、彼も死んでいったのです！

私たちもナジル人

みなさん、実は私たちもサムソンのように、神様のものとして聖く生きるように選ばれたナジル人なんです！「ええ？じゃあ、散髪屋さんに行っちゃいけないの？」いいえ、私たちのナジル人のしるしは、「イエス様の十字架の血によって罪を赦され、聖くされ、神様に従って生きる」ことです。私たちは神様のもののなのに、いつのまにか、イエス様を知らない人たちと全く変わらない、罪の生活を送っていませんか？「誰も見てないさ」、「ちよつとだけなら構わないよ」、「誰でもやっていることさ」って、ずるずる罪に捕らわれていませんか？今、もう一度心から罪を悔い改め、「イエス様、あなたに従います！」と祈りましょう。そして、「どうか聖霊に満たしてあなたのためにお願い下さい」って祈りましょう！神様は、求めるなら、聖く歩む力、神様と人を愛する力を下さいます。「わたしから離れては、あなたがたは何一つできない」とおっしゃるイエス様にしっかりとつながって、聖く力強く歩みましょう！

♪進め神の子♪

(ふくいんこどもさんびか2 38)

聖書 ルカ7・36～50 テーマ 罪赦された者として

序論

(高橋頼男)

イエスを食事に招いたパリサイ人シモンの家に、その町で罪深い女（不道徳な女、遊女）であつた者が、香油の入った石膏の壺をもつてきて、泣きながらイエスの後ろでみ足のそばに立ち、涙でみ足をぬらし、髪の毛でぬぐい、み足に口づけし、香油をぬりました。女の大胆な行為に対して、シモンをはじめその場にいた人々は驚き、ギョツとしました。さらに、罪の女のような行為を黙って許しておられるイエスを驚きあやしんで見つめました。

一、イエスのたとえと解き明かし(40～47)

シモンは、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわつてゐる女がだれで、どんな女であるか知つてゐるはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思ひました。しかし、イエスは女とその行為のわけをご存じでした。そしてこの女に対する見方は、シモンと全く異なつてゐたのです。

イエスはシモンが心で考えてゐることを見抜いて、一つのとえを語られました。五百デナリの借金を赦してもらつた

者と、50デナリの借金を赦してもらつた者とは、どちらが余計にその赦してくれた人を愛するかと話されました。このたとえによりイエスは、彼女の多くの罪が赦されており、この大胆な行為は、彼女が罪の赦しをいかに感謝してゐるか、その喜びをいかに表してゐるものであるかを明らかにされました。さらに、この女と比較して、イエスを食事に招いたシモンの誠意がいかにうわべのものであり、ところがなく、愛と尊敬を逸したものであるかを、シモンが直接に主の質問に答えることを通して明らかにされました。

この女とシモンのイエスに対する態度の違いはどこから来るのでしょうか。

二、罪の赦しについて(47～50)

この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされてゐるのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さないのことは、女の溢れる愛と、シモンの冷ややかな心との違いをみごとに言い当ててゐます。

この女は、すでに罪の赦しを受けてゐました。いつ、どこで罪の赦しを確信したのでしょうか。イエスが福音を語られた時、聴衆の一人であつたのか、人づてに聞いたのか、とにかく、イエスの語られた福音が、彼女に罪の赦しを確信させ

たと思われます。彼女は自分がいかに罪深い者であるかを知っており、罪が赦される資格さえない者であると思いました。しかし、イエスの権威ある救いの言葉を聞いた時、自分の罪が赦されたことを確信しました。それは、彼女にとつて踊り上がるほどの喜び、溢れる感謝となったことでしょう。罪を深く自覚する者にだけ、イエスの言葉は、良い知らせ、喜びに満ちた福音となつて届くのです。

私たちは、福音のメッセージを聞くたびに、自分の罪の深さ、また、罪の赦しの大きさ、とりわけ、十字架にその尊い命を犠牲にしてくださった御子の愛を覚え、最愛の一人子さえ、惜しまずに犠牲としてさげてくださいた父なる神の愛を思わずにはいられません。

三、大胆な愛と奉仕(37〜38)

この女が抱いた罪の赦しの恵みと感謝の思いが主への愛となり、主に対する切なる奉仕の願いにつながりました。彼女が主に近づくために、パリサイ人シモンの家に入つて行つた時、一斉に彼女に向けられた人々の視線は、冷ややかな、蔑みと非難、嫌悪感さえ含むものでした。彼女はそれを全身で痛いほど感じ取つたことでしょう。その場から逃げ出してしまいたいと思つたでしょう。しかし、イエスに対する感謝と

愛がそれに打ち勝ち、彼女を、一連の香油そそぎの奉仕へと駆り立てました。イエスは、この女の奉仕を喜んで受けられ、さらに、女に向かつて「あなたの罪はゆるされた」と宣言され、さらには、「あなたの信仰があなたを救つたのです。安心していきなさい」と語ってくださいました。

イエスは、預言者ではありません。救い主です。どんな罪をも赦し、きよめ、聖霊を注いで新しい人生に歩ませてくださる救い主です。

私たちも、イエスによつて罪を赦された者です。しかし、主を愛することや人々を愛することはどうでしょうか。シモンのように冷ややかな心、おさなりな奉仕、自分を誇つて人々をさばくようなところがないでしょうか。神の前にへりくだりましょう。そして、主に対する熱い愛と感謝があるかどうか、奉仕がおさなりになつていないか、高ぶっていないか、ご聖霊によつて探つていただきます。

結論

罪赦された喜びと感謝をもつて、主に仕える者とならせていただきます。主を愛し、喜んで仕える霊を注いでいただきます。

研究資料

(中島啓二)

イエスへの香油注ぎに関する記事は四福音書全てにあるが、ルカだけは別の出来事だと考えられている。ヨハネ(12・11)は、ベタニヤの三姉弟の家でマリヤがイエスの足に香油を注いだとし、マルコ(14・3・9)とマタイ(26・6・13)は、ベタニヤのらい病人シモン(三姉弟の父の名か?)の家でひとりの女がイエスの頭に香油を注いだとしている。枝葉の違ひはあるものの、これらの三福音書の記事は同じ出来事だとする見方が優勢である。ルカだけが別だと考えられる理由は、シモンが「パリサイ人」(36)であること、その女性が「罪の女」(37)とされていること、そして主への香油注ぎの意図が「葬りの用意」(マタイ26・12他)ではなく、罪赦されたことに対する感謝の応答であることなどである。

テキスト

36 食事を共にしたいと申し出た 教師を食事に招くことは有徳の行為であった。**食卓に着かれた** イエスは当時の作法に基づき、片ひじをついて横たわり、足を後方にのばして席に着かれた。

37 罪の女 娼婦や不道德な女性の婉曲表現。その悪評が町

中に知れ渡っていたのであろう。なお、招待されていない者が教えや施しを請うために家に入ることにについて、当時の社会は寛大であった。**香油が入れてある石膏のつぼ** 容器自体も高価だが、中身はさらに高価であった。この女性の本来の目的は、イエスへの感謝の表現として香油を(おそらく頭に)ささげることであったのだろう。

38 泣きながら 罪を赦されたことに対する感謝の涙であらう。もちろんそこに悔改めの意味も含まれていたと見ることもできる。**イエスのうしろでその足もとに寄り** イエスは食卓から足を壁側に向けて横たわっていたので、足もとには近づくことができたが、頭までは遠かった。**涙でイエスの足をぬらし** 意図的にというよりは、溢れ出る涙が思わずイエスの足の上に落ちたというのが真相に近いだろう。**自分の髪の毛でぬぐい** 予期せずイエスの足を涙でぬらしてしまったこの女性は、とつさに髪でぬぐったのかもしれない。**その足に接吻して** 接吻は深い敬意や感謝を表す行為であった。**香油を塗った** 香油は王の頭に注ぐにふさわしいもの。願っていた頭までは近づけなかったが、溢れ出る感謝から、彼女はその貴重な香油をイエスの足に惜しみなく注いだのである。

39 イエスがこの悪評高い女性の行為を拒まないことをシモ

ンは内心で批判した。この人が預言者であるなら イエスは預言者かもしれないという人々の期待にシモンは否定的であった。しかし彼の思いに反し、イエスはこの女性の状態だけでなく、シモンの心の内までも見通しておられた。

42 返すことができなかったのも、彼はふたり共ゆるしてやった。ここに人の功績によらない神の恵みの完全なる一方性ははっきり示されている。

44〜46 それから女の方に振り向いて、シモンに言われたシモンが非礼であつたという指摘もあるが、当時の風習を鑑みると必ずしもそうではない。しかし非礼でなかったとしても、彼はなすべきノルマを果たしたに過ぎなかった。対するこの女性は、罪を赦された喜びと感謝を、とどめることのできない愛のわざによって表したのである。

47 この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。その女性の愛の功績に対し赦しが与えられたという意味ではない。「愛した」は不定過去（過去に起こった一回的な出来事）、「ゆるされている」は現在完了（過去の出来事の結果が現在も続いていることを表す）であり、彼女は「愛した」より前に「ゆるされて」いたのである。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分

かる」（新共同訳）がより分かりやすい。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない。自分は神の恵みからもらえるほど罪深くはないと自己過信する人には、神の恵みの真の深さは分からないという意味だろう。

48 あなたの罪はゆるされた。これも現在完了。この時初めて赦されたのではなく、イエスは、すでに彼女が得ていた赦しを確認・保証された。

49 罪をゆるすことさえするこの人。祭司は罪の赦しを宣告するだけであるが、イエスは罪の赦しを「行われた」。人々は、イエスが預言者以上の権威を持つ方であると認めざるを得なかった。

50 あなたの信仰があなたを救ったのです。救いが愛などの行為によるのではなく、恵みによるのがここでも明らかに示される。安心して行きなさい。直訳は「平安の中へ行きなさい」。恵みを保つのではなく、恵みがその人を保つのである。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫（新聖書注解）。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ルカ7・36～50

タイトル

罪赦された者として

暗唱聖句

この女は多くを愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。

目標

多くの罪を赦された者として、キリストを愛して生きる。

ルカ7・47

導入

(水野晶子)

まだ牛乳やヤクルトが珍しかった頃のことです。A子ちゃんはお兄ちゃんが学校から帰ってこない前に、1本しかないヤクルトを牛乳の中に混ぜて飲んでしまいました。お兄ちゃんが学校から帰って来ると、A子ちゃんがヤクルトも牛乳も飲んだことを知ってA子ちゃんを責めました。悪いことをしたと思ったA子ちゃんはお兄ちゃんに謝りました。ところがお兄ちゃんは赦してくれません。そこにお母さんが来て、赦そうとしなかったお兄ちゃんを叱りました。お兄ちゃんとA子ちゃんはお母さんを通して、欲張ってはいけないこと、赦すこと、赦されることを学びました。

多くを赦された人

聖書にたくさんのお話を赦してもらった人の話があります。ある日、パリサイ人のシモンさんがイエス様を食事に招待しました。その当時の食事の作法は、片肘をついて横たわり、足を後ろに伸ばして席に着きます。みんなが食卓に着いた時、ひとりの女の人が美しい石膏のつぼを持って入ってきました。その女の人は泣きながらイエス様の足元にひざまずきました。あまり泣いたので涙でイエス様の足がぬれてしまいました。涙でぬれた足を女の人はていねいに髪の毛でふきました。心から感謝してその足に接吻し、王様の頭に油を注ぐような思いで、香油を惜しみなく足に注ぎました。いったいなぜ、この女の人はこんなことをしたのでしょう。しかもこの女の人は、町でうわさされるような悪いことをしている人だったのです。

イエス様を食事に招いたシモンさんは心の中で、「もし、やつが神様から遣わされた人なら、この女の正体がわかるはずだ」と思いました。イエス様は、この女の人のこともシモンさんが心の中で思っていることも見抜いて、シモンさんにこんな質問をしました。「ある人が二人の人にお金を貸しました。一人には150万円、もう一人には15万円。と

ところが二人ともどうしても借金を返せません。金を貸した人はたいへん思いやりのある人だったので、二人の借金を帳消しにしてやりました。この二人のうちどちらがよいに、この人に多く感謝し愛したでしょうか」。シモンさんは「そりゃあ、たくさん借りていた人ですよ」と答えました。

イエス様は女の人をごらんになり、言われました。「この人は涙で足を洗い、髪でふいてくれました。あなたは私に足を洗う水さえ出してくれませんでした。この人は足に口づけして、高価な香油を注いでくれました。あなたは、礼儀としてする挨拶あいさつの口づけも、オリーブ油も注いでくれませんでしたね。だから、この人の多くの罪が赦されていることは、私に対して示した愛の大きさでわかるのです。少ししか赦されない人は、少ししか愛さないのです」。

罪の赦しと愛の応答

女の人は周りの人から後ろ指をさされ、非難され軽蔑けいべつされていることを知っていました。自分が罪深い者であることを自覚し、決して罪が赦されることはないと思っていました。しかし、どこかでイエス様の語られる福音を聞いたのです。権威あるイエス様の救いの言葉を聞いた時、自分

の罪が赦されたことを確信しました。その時は、うれしくてうれしくて、躍り上がりたいほどだったでしょう。イエス様がシモンさんの家に来ると聞いた時、何としてもイエス様に感謝したいと思いました。イエス様への愛の応答が、あふれる涙で足を洗い、髪の毛で足をふき、香油を注ぐ行為となりました。イエス様は、この女の人のしたことを喜んで受け取られました。そして、直ただちに「あなたの罪はゆるされた」と宣言され、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と、励ましてくださいました。

私たちは、シモンさんのように人の罪を問題にして、自分の罪には気付かない人でしょうか？それとも、自分は神様に喜ばれないことを言ったり、したりする罪を持っていることを認め、そのために十字架にまでかかって死んでくださったイエス様の愛を信じて、罪赦されている人でしょいか？たくさんの罪を自覚し、その罪が赦されている人はイエス様をもっと愛し、イエス様とお友だちを愛し仕えていきましよう。

♪両手いっぱい愛♪

(ブレイズワールド 13)

聖書 ルカ10・25〜37 テーマ 近づき助ける

序論

(福井文彦)

この箇所はルカだけが記している有名な「よいサマリヤ人のたとえ」です。ある律法学者が「イエスを試みよう」として「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」と質問しました。そこでイエスは、「律法には、永遠の命とは神への愛と隣人愛であると記されている。あなたは、助けを必要としている人の隣り人となりなさい」と教えられたのです。

一、律法の教え

律法学者とは律法の教師とも呼ばれましたが、パリサイ人の中にもサドカイ人の中にもいました。彼らの大部分の者は、宗教の外面的な形式に注意を払う偽善者であり、心の中にはいささかのへりくだりの思いもなく、神を知りたいという願いも全くありませんでした。彼らは、格別に貧しい人々に重荷を負わせ、助けようなどとは少しも考えませんでした(ルカ11・45〜52)。

イエスは、ある律法学者の「何をしたら永遠の生命が

受けられましょうか」との質問に対して、「(律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか)」と質問されました。彼の答えは正しく、旧約聖書の教えを知っていましたし、神を愛し隣人を愛することであることは彼には明らかでした。

そこでイエスは「そのとおり行いなさい」と律法学者にお迫りになりました。彼は自分がこれらの律法を破り、自分の隣人愛について、愛の不足を感じていたのです。しかし、彼は悔い改めず、律法の前に正しい者であることを立証しようとしていました。それで、彼は、「自分の立場を弁護しようと思つて」、イエスに「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」と逆に問い返したのです。

二、よいサマリヤ人

このような律法学者の逃げ口上に対して語られたのが、よいサマリヤ人のたとえです。

エルサレムからエリコへ向かっていたユダヤ人が強盗に襲われ、半殺しにされ倒れていました。そこを祭司が通りましたが、倒れている人の向こう側を通って行きませんでした。彼は律法にあるように、死体によって汚れることを避けたのでしょう。しかし、エルサレムの神殿での奉

仕を終えて帰る途中ですからその心配はなかったはずだ。次にレビ人が通りました。彼は倒れているユダヤ人に気づいたのですが、祭司同様に見えぬふりをして、向こう側を通って行きました。

彼らは半殺しにされ倒れている人を助けることよりも、律法によって求められている儀式的なきよめを守ろうとして、律法が真に意図する愛に生きようとしませんでした。

ところが、強盗に襲われ半殺しにされたユダヤ人に本当に親切にしたのはサマリヤ人でした。ユダヤ人とサマリヤ人とは敵対関係にありました。それにも関わらず、サマリヤ人は「彼を見て気の毒に思い」ました。それでこの危険な場所で立ち止まって十分な介護をし、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行き、そこで介抱したのです。その上、宿料二デナリを払い、それ以上の必要経費があれば、それも支払う約束をして旅立ったのです。

三、隣り人

イエスはよいサマリヤ人のたとえを話し終えられると、律法学者にお尋ねになりました。「この三人のうち、だが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」と。

すると、彼は「その人に慈悲深い行いをした人です」と答えました。そこで、イエスは「あなたも行つて同じようにしなさい」と、愛の実践を命じられたのです。

ある人は隣り人とは助けを必要としているユダヤ人のことであると考えられるかもしれません。しかし、イエスはそのような意味でたとえをお話しになったものではありません。よいサマリヤ人が隣り人なのです。これが律法学者に対する答えです。

律法学者は、他の人を愛する時、愛する価値のある隣人はどこまでの人か、その愛する義務と限度を教えてほしいと求めたのです。それに対してイエスは「愛の対象には限度がなく、敵であっても隣り人となつて愛することである。あなたが愛の心を持ち、あなたが助けることができるすべての人々の所へ出かけて行く隣り人になれるかどうかの問題なのである」と教えられたのです。

結論

私たちクリスチャンは、聖霊によつて愛に満たされ隣り人となるべきです。そして、助けを必要としている人であればだれにでも近づき、助けることができる者となりますでしょう。

研究資料

(小平徳行)

このたとえ話から、私たちが愛することによって隣人になることを学ぶ。

テキスト

25 イエスを試みようとして 教えてもらうためでなく、どのように答えるかを見てイエスの知恵を試すため。何をしたら永遠の生命が受けられましようか 永遠の生命を受け継ぐことは、当時のラビたちにとって一般的な神学的問いであった。「何をしたら」と問うているところから、律法学者は、行ないによる救いを考えており、神の恵みを理解していなかったことを示している。

27 律法学者は、申命記6・5とレビ記19・18を引用して答えた。イエスも一番重要な律法は何かと質問された時、同様に答えていることから(マルコ12・29〜31)、この律法学者は明らかに律法に対して深い洞察をもっていた。

29 自分の立場を弁護しようとして この律法学者は確かに律法に通じていたが、実行する事に欠けていた。そのため、自分を弁護しようとした。隣り人 ラビたちに

とつてはユダヤ人同胞を意味した。レビ記19・18では、明らかにこの意味で用いられているが、同34節では、その地にいる他国人にも当てはめられている。

30 ある人 ユダヤ人であると考えてよい。エルサレムからエリコに下って この区間は約28キロメートルあり、標高差約千メートルを下る道で、ひっそりとした砂漠や岩地を通る。この道の強盗は有名で、特に一人で旅をする者を襲った。途中にマアレー・アドラーム(赤い坂)と呼ばれる場所があり、伝説ではそのあたりに強盗が出没して多くの血が流されたため、土地が赤くなったので、そう呼ばれているという。

31 ひとりの祭司が…この人を見ると、向こう側を通って行った 祭司は倒れている人の向こう側を通った。彼は律法にあるように、死体によって汚れることを避けるためと思われる(レビ21・1)。しかし祭司は「下ってきた」とあるように、エルサレム神殿での奉仕を終えて帰る途中であった。したがって実際は宮での務めを果たせなくなるといふ心配をする必要がなかった。もし明らかに生きていると判断できれば憐みを優先させるが、ほとんど死んでいるように見えたので、祭司は危険を冒そ

うとはしなかった。

32 レビ人 祭司同様に汚されることを避けようとした。祭司とともにレビ人は、ユダヤ教の聖職者として率先して律法を実行すべき人として登場している。それゆえにこの両者の姿は、律法によって求められている儀式的なきよさを守ろうとして、律法が真に意図する愛をないがしろにする律法主義の真相を明らかにしている。

33 サマリヤ人 祭司やレビ人、律法学者が軽蔑し、差別した民でユダヤ人は彼らとの接触を避けた。ユダヤ人とサマリヤ人の間にある敵意の歴史から見て、襲われたユダヤ人を助けることが最も期待できないのがサマリヤ人であった。しかし襲われたユダヤ人を助けたのは、このサマリヤ人であった。**気の毒に思い[キ]スブランクニゾマイ** この言葉は「はらわた」から来ており「はらわたを突き動かされる」という意味である。サマリヤ人の行動のすべては、この思いのなせるわざであった。この言葉は、次週に登場する父親の「哀れに思つて」(ルカ15・20)や、キリストがあわれみを示される時に使われている(マタイ9・36、14・14、15・32、20・34など)。したがって、このサマリヤ人の中にキリストを読み取るこ

ともできる。

34 35 オリブ油とぶどう酒 オリブ油は傷を洗うため、ぶどう酒は傷口の消毒のためであり、両方を混ぜて軟膏として用いられた。**自分の家畜に乗せ** つまりサマリヤ人自身は歩かなければならなかった。**宿屋に連れて行って介抱した** このサマリヤ人は、襲われた人を宿屋に連れて行く事で自分の義務を果たしたとは考えず、続いて彼の世話をした。**デナリ二つ** 二日分の労賃だが、当時の食費から推計すると宿賃としては高額であった。さらに不足分の支払いまで約束した。彼は自分のできるすべてをしたのである。

36 だが隣り人になったと思うか 隣人を愛するとは、愛するべき価値のある「隣人はだれか」と愛の対象を制限することではなく、たとえ敵であっても「隣人になって」愛することであると教えている。そのためにはキリストの愛に満たされることが必要である。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris Luke (The Tyndale New Testament Commentaries)

聖書

ルカ10・25～37

タイトル

親切な隣り人はだれ？

暗唱聖句

この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか。

ルカ10・36

目標

助けを求める人々に、よき隣人として近づき助ける者となる。

導入

(松浦みち子)

二〇一一年三月の東日本大震災では、未曾有の被害がでしたが、日本国中だけでなく、世界の各地から義援金や物資が送られ、多くのボランティアの方が駆けつけてくださいました。今もなお、活動が続けられていることは力強いですね。

隣り人とはだれのことですか？

イエス様が人々に聖霊によつて喜びあふれてお話されるのを、じつと聞いていたある律法学者がイエス様に語りかけました。この人はイエス様を試そうという下心をもつて質問しました。「先生、何をしたら永遠の生命を自分のものとして受けることができるでしょうか」。イエス様は「聖書には、

なんと書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか」と言われました。すると、律法学者はすぐに『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』、また、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』と書いてあります」と答えました。「あなたの答えは百点です。その答えのとおりにそれを実行しなさい、そうすれば命を受けることができます」とイエス様は言われました。律法学者は心の中で、「ふん、そんなこと、言われなくても自分は行っているよ!」と思つていたので、続けて「では、わたしの隣り人とはだれのことですか?」と尋ねました。実は、律法学者の考えていた隣り人とは、自分の周りにいる家族をはじめ身近な人、自分の仲間のことだけで、仲間でない人々は隣り人ではないと思つていたのです。

よいサマリヤ人のたとえ話

イエス様は、その心を見抜き、彼を見つめてたと言話をされました。

ある人がエルサレムからエリコに向かう途中、寂しい岩だらけの山道を急ぎ足で歩いていました。「さあ、暗くなつたらたいへんだ!このあたりは強盗がよく出るらしいからなあ」。

すると、突然岩陰からワァーと棒を振りかざした男たちが飛び出してきて、「おい、命が惜しけりや、金をだせ！」と叫びながら、旅人を襲い、棒でボカボカ殴ったり、ドンドンとけったり、着ている服までも何もかも奪って逃げていきました。「た、たすけてえー」、旅人はウーン、ドタツと倒れて、もう起き上がる力もありません。死んだように倒れている所に、運よく神殿で神様に仕えている祭司が通りかかりました。「おやつ、だれか倒れているぞ」と気づきましたが「厄介なことに巻き込まれたらいへんだあ！」と見ない振りして、道の反対側をすたこらさつさとしてしまいました。次に、レビ人がやってきました。この人も神様の働きをしている人です。この人も「あつ、強盗にやられたな。大変だ！」と思いい、声もかけずに道の反対側を逃げるように行ってしまうしました。「あーあ」旅人は体も心もズキズキ痛み、「もう、ここで死んでしまうのかなあ」とじつと横たわっていました。その時です。かすかにカッポカッポというロバの足音が聞こえてきました。その音は近づき、サマリヤ人の旅人は「こりゃあ、たいへんだ！」と急いで駆け寄り、傷を消毒し、オリブ油を塗って包帯をし、自分のロバに乗せて宿屋まで傷ついた旅人を運びました。そして、一晩中看病しました。翌日、宿屋の

主人にお金を渡して、「この人をお世話してあげて下さい。費用がよけいにかかったら、帰りがけに私が支払いますからよろしく」と言って出かけて行きました。

隣人になる

話し終わると、「この三人のうち、だれが隣人になったと思うか？」と尋ねられました。律法学者は「旅人を助けてあげた人です」と答えました。「そうです。あなたも行つて同じようにしなさい」と言われました。当時ユダヤ人とサマリヤ人は仲の悪い間柄でした。しかし、助けたのはサマリヤ人でした。あなたの隣り人とは、あなたの助けを必要としている人のことです。隣人になることはたやすいことではありません。しかし、イエス様を信じるとき私たちの心に神の愛が注がれ、隣人を愛するやさしい心が与えられるのです。

アフリカのニジエールで医療活動をしている谷垣雄三医師は、高校生のとき峰山教会で、よきサマリヤ人の話をきき、自分も良き隣人になりたいと現地で私財を投じ、病院を建て医療活動をしておられます。テレビにも放映されました。

♪ 小さいわたしの ♪

(ホ・子どもさんびか 14)

聖書 ルカ15・11〜24 テーマ 神に立ち返る

序論

(福井文彦)

有名な「放蕩息子」として知られている箇所です。たとえの中心は放蕩息子のように思われますが、真の主役は父です。「死んでいた」のも同然の息子を迎え入れる父の姿を通して、この物語ほど天の父なる神の愛を豊かに表しているたとはありません。この話を通して、私たちの本当の幸せは神にあることを教えられます。

一、父を離れて

弟息子は、父の存命中に遺産相続を要求し、与えられた財産全部を早速お金に換えて、父を離れ遠い所へ旅立ちました。ところが、そこで放蕩の誘惑にとらえられ、全財産を使い果たしたのです。

弟息子がすべてを使い果たした時、その地方にひどいききんがやってきました。彼はたちまち困窮して、ある人の所に世話になろうとしました。しかし、世間は甘くないもので、その人は彼に豚を飼わせたのです。イスラ

エルでは豚は汚れた動物ですから、豚飼いは奴隷の仕事でした。彼は屈辱的な仕事についたのですが、それでも食べることに窮してしまつたのです。彼は豚の食べるいながまめを食べたいと思うほどでしたが「それをくれる人はいなかった」(16節直訳)のです。

何が問題だつたのでしょうか。誘惑に満ちた悪い環境、あてにならない表面的な人間関係、予期せぬ自然災害ででしょうか。しかし一番の問題は彼が自由を求めて父から離れたことでした。この弟は父の心を知らず、父の気持ちを完全に無視しました。彼の関心は父のことより財産であり、人よりもまず自分のことであり、父との関係を煩わしく思い、父を離れたのでした。

二、父のまへへ

弟息子は食べ物にも窮し、豚飼いの仕事をしてやつと餓死を免れていました。しかし、空腹で汗と埃にまみれ、豚と一緒に暮らす惨めなどん底の生活でした。そんなある日、つくづくと我が身をかえりみ、彼は「本心に立ちかえつて」、今まで気づかなかつた自己を見出したのです。このような状況に至つたのは環境や自然災害や人の関係ではなく、自由を求めて父のもとを離れた自分勝手

な生き方にあったことに気づいたのです。

彼はふと思い起こしました。「父のところには食物の
あり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで
飢えて死のとしている」と。とにかく家に帰って「父よ、
わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯し
ました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。
どうぞ、雇人のひとり同様にしてください」とお
願いしよう。

彼は自分の人生の悲惨さを認め、その原因である自分
の罪を告白して（悔い改めて）父に帰ろうと決心したの
です。本来ならば到底赦されないのであるが、父の情
けによって雇人の一人にでもしてもらおうと決心するの
です（黙示録2・5）。

三、迎える父（神）

このたとえ話のクライマックスは、放蕩息子を迎える
父の愛です。弟息子は、〈そこで立つて、父のところへ
出かけた〉のです。彼にして見れば、父から離れて遠い
所へ行つた時のことを思えば、どの面下げて帰ればよい
のか、とても父に合わせる顔もなかったでしょう。

しかし、父は日々、首を長くして、息子の帰りを待つ

ていたのです。父は変わり果てた姿の息子を遠くから認
め、走り寄り、首を抱いて接吻しました。それだけでは
ありません。息子のさんげのことは最後まで言わず、
最上の着物を着せ（新しい品性）、指輪をはめ（子とし
てのしるし）、くつをはかせました（新しい歩み）。

さらに、〈肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食
べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに
生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから〉
と、盛大な祝宴が開かれました。

こうして、父から離れ豚と一緒に暮らす惨めなどん底
の生活をしていた放蕩息子は、父の愛で満ち足りたので
す。

結論

神から離れた人生は放蕩息子のように幻滅に終わります。
しかし、神のもとには真の幸があります。その神
のもとに帰るために、すでに父の側で一切の備えが出来
ています。それがイエス・キリストの十字架です（ヨハ
ネ19・30）。ただ、私たちが悔い改めて、父の元に帰る
なら無限の愛をもつて迎え入れてくださり、だれでも満
ち足りた本当の幸いな人生を送らせてくださるのです。

研究資料

(小平徳行)

15章全体は、3つのたとえ話から成っている。全体としてのテーマは「失われたものを取り戻す喜び」である。その中で、ここは罪人を赦す神の愛のたとえ話と言うこともできる。イエスはここで福音の全体を語ったのではなく、福音の主動力となる神の赦しの愛について語っている。また、先の2つの話では、捜す神が、ここでは、帰って来るのを待っている神が描かれていることから、人間が神のもとに帰ることに必要を教えている。

テキスト

12 わたしがいたたく分 遺産の分配は長子が他の兄弟の二倍となる。したがってこの場合、弟息子は父の遺産の三分の一(申命記21・17)である。遺産の分配を父の存命中に求めることは当時法外なことで「父よ、わたしはあなたがすでに死んでいればよかった」と言うことに等しかった。父の生存中に分けた場合、長子の分は父の死まで父の手中にあり続ける。

13 全部とりまとめて 新共同訳では「全部を金に換えて」。彼が何も残さないで出て行ったということは、や

がて帰ってくるという可能性は一切考えていないということであり、また父親を顧みる気持ちも一切ないということである。遠い所 そこでは豚が飼われていることから、異邦人の世界へ行ったということである。

15 豚を飼わせた 律法によれば豚は汚れた動物とされていた(レビ11・7)。従ってユダヤ人は普通の状況では豚を扱うことは決してなかった。この時、弟息子は豚の世話を考えなければならぬほど、絶望的な困窮にあつたのである。

16 何もくれる人はなかった 人々の弟息子に対する扱いは豚以下であつた。

17 本心に立ちかえって 困難には人を現実に向き合わせる手段となる。彼は父のもとでは雇い人さえも食物があり余っていたことを思い起こし、父のもとにあることのはかり知れない豊かさで自分のみじめさに気づいたのである。

18 19 天に対しても 「天」とは神に対する敬虔な思いから来る遠回しな表現。弟息子はまず神に対して罪を犯したことを認めている。罪はいつでも、人に対する以上に神に対するものである。もうあなたのむすこと呼ば

れる資格はありません 罪ゆえに、息子として扱われる権利のすべてを失ったことを認めていた。そこで最低生活でできるだけの賃金を得ることができるよう、雇人のひとりにしてもらおうとした。

20 父のところへ ここで「彼の故郷へ」とか「彼の家へ」ではなく「父のところへ」と言っているのは、父との関係の回復に焦点が当てられているからである。まだ遠く離れていたのに 明らかに父親は息子の帰還を期待し、見張っていたことがわかる。哀れに思って[ギ]スブランクニゾマイ 先週の研究資料の33節の解説参照。

走り寄り 父親が走り寄るといふのは、古代オリエントの民族からすれば驚くべきことであった。接吻した 厳密には「何度も接吻した」とか「愛情込めて接吻した」と訳すことができる言葉で、父親がうわべだけでなく心から息子を受け入れたことを示している。

21 ここでは息子は事前に考えていた「雇人のひとり同様にしてください」という言葉を父親に対して言っていない。その時になつたら言う気になれなかったのか、それとも父親が息子を歓迎することに夢中で息子に最後まで語る時間を与えなかったのか、はつきりしないが、お

そらく後者であろう。

22 最上の着物 社会的地位を表す。指輪 印章にも用いられ、権威を表す。はきもの 自由の象徴。奴隷は普通、はきものをはかなかった。これらのものは、帰つて来た息子を雇い人としてではなく、真に息子として迎え入れていることを表わしている。

23 肥えた子牛 特別なもてなし用に飼育されたもので、ここで用いたということは、これ以上にふさわしい機会を決めないで判断したからである。これは町民全体にふるまうに十分な量であったゆえ、この祝宴は大規模なものであっただろう。上流階級の家族はしばしば、息子の成人、結婚に際し、町民全体を祝宴に招待した。

24 死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから ここに父親のあふれるばかりの喜びが表現されている。神のもとを離れた人間は、肉体の命があつても、霊的には死んでいるのである（エペソ2・5）。

祝宴 イエスが神の国の象徴として好んで用いている（13・29、14・15〜24）。

参考図書 11月4日分と同じ。

聖書

ルカ15・11～24

タイトル
暗唱聖句

そうだ、帰ろう！ 父のもとへ

このむすこが死んでいたのに生き返り、
いなくなっていたのに見つかったのだ
から。

ルカ15・24

目標

神のもとに真の幸いがあることを知り、
神に立ち返る者となる。

導入

(松浦みち子)

二〇一二年五月のことです。アメリカの西海岸に、津波で流されたサイン入りバレーボールが流れつきました。家も思い出の写真も何もかも失くした女の子は、サイン入りのボールを手にして涙を流して喜びました。どんなにうれしかったことでしょう。

家を出た息子

ある所に、お父さんと二人の息子が住んでいました。家にはたくさん雇い人がいて、野菜作りや牛、羊などの世話を忙しくしていました。息子たちも家の仕事を手伝いながら毎日を過ごしていました。ある時、弟息子はふと、つぶやきました。「あーあ、いやになっちゃうぜえ。毎日毎

日、お父さんの言うことをきかなくっちゃあならねえ、つまんねえーなあ。何か面白いことはねえかなあ。こんな田舎じゃなくって、にぎやかな町に行つて思い切り遊びてえなあ」。そう思うと、もう我慢できません。「そうだ、お父さんにお願ひして、僕の分け前をくださいと言おう」。「お父さん、お願ひです。僕は町に行きたいのです」と言いしました。お父さんは心配顔をしながら「大丈夫かい？本当に一人で暮らしていけるのかい？」そう言いながら弟息子の願ひどおりにお金を分けてあげました。弟息子は幾日もたたないうちに、もらった物を全部とりまとめて遠い所に旅立ちました。「もう、畑仕事もしなくていいんだ。お金もたくさんあるし、自由に楽しく暮らせるぞ！」弟息子は足取り軽く意気揚々と家を出ていきました。遠い町に着くと珍しいものが一杯です。働きもせず、幾日も幾日も遊びほうけていました。ご馳走もいっぱい食べ、人にも気前よくおごるものですから、友達もたくさんできました。しかし、あんなにたくさんあったお金も湯水のように使つたので底をついて一文無しになつてしまいました。「何とかなささ、友達もいっぱいいるしな。アルバイトでもしようかな」、なんて気楽なことを考えていました。しかし、頼りにして

いた友達も、お金がなくなつたとたん冷たくなり、離れて
いって一人ぼっちになつてしまいました。しかも、その地
方に飢饉ききんが起り、食べる物もなくなり、アルバイトどこ
ろではありません。やつとの思いで見つけたのは豚の世話
をする仕事でした。「あー、お腹がすいてペコペコだ。豚
のえさのいなご豆でもいいから食べたいなあ」。そう思い
ましたが、それももらえませんでした。

ハッ、と気づいた息子

その時、弟息子はハッと我にかえりました。「そうだ！
お父さんのところには食べ物がたくさんあり余っているの
に、僕はここで飢えて死のうとしている。ああ、僕はなん
てばかだつたんだろう。家に帰ってお父さんにあやまろう。
『もう、あなたの息子と呼ばれる資格はありません』と」。

迎えてくれたお父さん

息子は長い間、父親のことを忘れていました。ところが
お父さんは片時も忘れていません。息子の帰りを今か今か
と待ち続けていました。毎日地平線のかなたを見つめなが
ら、「今日こそ帰ってくるだろうか」と、息子の姿を探し
ていました。そんなある日、はるか遠くとほとほと歩く人
の姿を見つけました。お父さんは、「息子だ！」と走りよ

り、ボロボロの姿の息子を迎えて、しっかりと抱きしめたの
です。「お父さん、わたしは天に対しても、お父さんに対
しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありま
せん。雇い人のひとり同様に……」。お父さんは息子に、最
後までは言わず召使に命じました。「さあ、早く、最上
の着物を着せなさい。指輪をはめさせ、靴を履かせなさい。
肥えた子牛をほふつてご馳走を用意しなさい、今日はお祝
いだ！息子が死んでいたのに生き返り、いなくなっていた
のに見つかったのだから」と。

天の神様はこのお父さんのような方です。私たちが帰る
のを今か今かと待っていてくださるのです。神様の所に帰
る方法はただひとつ。自分の罪を悔い改め、赦ゆるしを求める
ことです。さあ、私たちも神様の所に帰りましょう。それ
が、人間にとって一番幸せな所です。「神が人と共に住み、
人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から
涙を全くぬぐいとおつて下さる」（黙示録21・3〜4）ので
すから。

♪父なる御神に♪

（新聖歌 449）

聖書 ルカ16・19～31 テーマ 死後への備え

序論

(福井文彦)

これはルカによる福音書だけにある有名なたとえ話ですが、実話であるという人もいます。しかし、それは重要な問題ではなく、イエスが一つの明確な目的をもつて語られたということこそが大切なのです。イエスは、①人生はこの世だけでなく死後があること、②この世の生活と死後の生活とは密接な関係があること、を話されたのです。

一、金持とラザロ

ある金持がいました。彼は、別にこの世の法律を破るようなことをしたわけではありません。ただ、〈彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた〉のです。紫の衣や細布を着るということは、金持でなければできない服装でした。〈毎日ぜいたくに遊び暮らしていた〉とは、詳訳聖書には「毎日ほかにどんなに騒ぎをしていた」と訳されています。自分の友たちを呼んで宴会を開き、どんな騒ぎをして、ぜいたくに暮らしていたのです。しかも一日や二日ではなく毎日でした。

ところが一方で、〈ラザロという貧しい人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのごうと望んでいた〉のです。彼は食べる物さえろくに与えられないで、食卓から落ちる食べくずでようやく命をつないでいました。〈その上、犬がきて彼のでき物をなめていた〉のですから、あまりに惨めなラザロでした。ところが金持は、ラザロのそんなことはいつこうお構いなしの毎日でした。

二、死後の二人

ある日、貧しいラザロが死にました。おそらく彼はだれにも看取られることなく死んだのでしょう。ところが死んでそれで終わりではなく、〈御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた〉のです。ユダヤ人は当時、〈アブラハムのふところ〉とは、楽しい、安息の場所と考えていました。彼は、パラダイス(ルカ23・43、天国のようなところ)に行つたのです。

その後、金持も〈死んで葬られ〉ました。おそらくお金がたくさんありますから、華々しい盛大な葬儀だったことでしょう。しかし、彼は〈黄泉〉に行つたのです。金持が黄泉で苦しみながら、目をあげると、はるかかなたにアブ

ラハムとラザロが見えました。金持はアブラハムに向かって叫びました。「父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。…わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています」と。

しかし、アブラハムの答えは否定的でした。金持は、この地上にあつては生涯良い物を受けていたにもかかわらず、富と快楽のために生きました。苦しむ人を見かけながら、何もしないで、自分の事だけを考えることの罪の重さを知らされます。他方、ラザロは生前悲惨な生涯を送りましたが、神をのろつたり不信に陥ることなく生きたのです。それで、「彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている」と。しかも金持とラザロの間には大きな淵があり、黄泉からパラダイスには移行できないのです。

三、死後の備え

そこで金持は自分のことをあきらめました。その代わりに地上にいる肉親たちのところにラザロを送つて、自分の二の舞を演じないように警告してほしいと願ったのです。するとアブラハムは「彼らにはモーセと預言者がある。それに聞くがよからう」と答えました。すなわち、地上の肉親には旧約聖書が与えられている。救われるためには聖書

に聞くべきであるということです。そこで金持は重ねて、ラザロを兄弟のところに送つて、「『死後の世界にはパラダイス（楽しい安息の場所）と黄泉（苦しみの場所）がある』と言えば、兄弟たちはかならず悔い改めます」と言つて嘆願したのです。しかしアブラハムは、「もし彼らがモーセと預言者にと耳を傾けないなら、死人の中からよみがえつてくる者があつても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであらう」と断言したのです。

人間は死んだ後が大事です。神はおいでになるのです。永遠のさばきと苦しみがあり、悔い改めてイエスを信じるなら救われる。ということをも勧めても、モーセと預言者（聖書）に耳を傾けない者は、いかに奇蹟を見ても信じないということです。それほど人間は不信仰で、心は頑固なのです。

結論

このたとえ話は、①私たちの生涯は、この世だけで終わるのではない、②死後の世界があり、現在の生活によつて決定される、③聖書のみ言葉に聞き、悔い改めてイエス・キリストを信じるなら救われ、天国に行けること、を教えているのです。

研究資料

(小平徳行)

このたとえ話は欲の深いパリサイ人に対して語られている(ルカ16・14～15)。ユダヤ人には、自分たちはアブラハムの子孫であり、神に選ばれた民族なので、誰でもこの世を去った後には天国に行けるという考えがあった。しかしバプテスマのヨハネは、たとえアブラハムの子孫でも、悔い改めて、それにふさわしい生活をしていなければ、神の民から切り離されてしまうと警告している(ルカ3・8～9)。同様にイエスもここで、この世における行為が、来世における報いに直結する事を語っている。

テキスト

19 紫の衣 非常に高価な染料で染められた服で、上着として用いられた。**細布** エジプト亜麻の柔らかい下着。これらはこの金持ちのぜいたくな様子を示すものである。

20 ラザロ エルアザルの短縮形で「神は私の助け」の意味。彼は貧しさの中でも神に信頼して歩んでいたのであろう。**玄関** 大きな門か宮殿のポーチ(大きな柱で支えられた屋根付き玄関)を示す。

21 食卓から落ちるもので飢えをしのぐと 金持ちが彼

に対して無関心であり、自分からは残飯さえも与えていなかった。食卓から落ちるパンくずというのは、当時の習慣からすると、テーブルなどをふき取るためのパンであり、使用した後、テーブルの下に捨ててしまうものであるかもしれない。この金持ちは特に重大な罪を犯してきたとは言われていないが、実践すべき隣人愛を怠り、自分のためだけに生きていたことが彼の非難されるべきことであった。**犬がきて彼のでき物をなめていた** 犬はユダヤ人には、あたかもネズミやその他の有害な動物であるかのようにみなされていた。でき物を犬の舌でなめられることは、おそらく痛みを感じることであったであろう。

22 御使いたちに連れられて 金持ちは葬られたが、ラザロは葬られたとは記されていない。その遺体は野良犬のように捨てられたが、ラザロ自身の霊魂は御使いに連れていかれた。**アブラハムのふところ** 天の祝宴におけるアブラハムの隣席のことで、非常に名誉ある場所を意味する。

23 黄泉(キハデース) 新改訳では「ハデス」、新共同訳では「陰府」。これは死後すべての魂が復活の時までとどまる世界を意味している所もある(使徒2・27)。ここではむしろ、新改訳聖書のあとがきにあるように「不信者が死

後、終末のさばきを待つ中間状態で置かれる所」であると解釈することが出来る。ちなみにゲヘナは「神の究極のさばきにより、罪人が入れられる苦しみ場所」をさし、地獄の同意語と考えてよい。金持ちの苦しむ様子から、ここでは黄泉はゲヘナと同じ意味で用いているようにも思われる。しかし最後の審判において黄泉（ハデス）は火の池（ゲヘナと同意）に投げ込まれる（黙示録20・13～15）とあるところから、黄泉は地獄と関わりはあるが、区別されていると考えられる。

25 しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている 生前と死後とで逆転現象が起きている。金持ちは、地上では願うものはほとんど手に入れることができたが、ここでは水の一滴さえ与えられず、苦しみの中にいる。しかしラザロは、地上での悲惨な生涯とは裏腹に、死後大いなる慰めを得ているのである。まさにマリヤの賛歌で歌われていることが起きている（ルカ1・51～53）。

26 大きな淵がおいであって、…渡ろうと思つてできない 死後の世界において一方の状態から別の状態に移ることはできない。

27～28 彼らに警告していただきたいのです この金持ち

は、もし自分にもこの警告が与えられていたなら、違う行動をとっていたらうと考えている。

29 モーセと預言者 旧約聖書全体のこと。それに聞くがよからう この金持ちの黄泉での苦しみは、彼の富のゆえではなく、み言葉を無視し、聞き従わなかったことによるのである。

31 死人の中からよみがえってくる者があっても…聞き入れはしない 実際に死者の中からよみがえったラザロ（ヨハネ11章）を見ても、イエスを信じようとしなかった者たちはいた。聖書の言葉を聞いて信じようとしないうちは、たとえ復活などの奇跡を目の当たりにしても信じることはない。

このたとえ話において大切なことは、今この地上で生きている間に、聖書の言葉に聞き従い、富ではなく、主に仕えるべきであるということである。今は恵みの時、救いの日である（Ⅱコリント6・2）。

参考図書 11月4日分と同じ。

聖書

ルカ16・19～31

タイトル

天国にいく準備は？

暗唱聖句

彼らにはモーセと預言者がある。それに聞くがよろう。

目標

ルカ16・29

死後の裁きの存在を知り、み言葉によって備える者となる。

導入

(松浦みち子)

皆さんは、遅刻して「しまった！」ということがありませんか？また、あの時こうしておけばよかったのに！と後悔したことがありますか？また、今しなければならぬことを、明日に延ばして苦い経験をしたことがありますか？時間は待ってくれないのです。

今日は、どんなに後悔しても取り返しのつかなかったお話を、聖書から聞きましょう。

お金持ちとラザロ

イエス様が弟子たちに「神様とお金の両方を愛することはできません。たとえ、お金を犠牲にしても神様に仕えることのほうが大切です」と教えられました。それを横で聞いていたパリサイ人たちが、「バカな教えだ！」とあざ

笑いました。彼らは、神様と同じくらい、地上の富も大切なものと考えていたからです。そんな考えのパリサイ人たちに、イエス様はたとえ話をなさったのです。

ある所に金持ちがいました。すばらしい服をきて、大邸宅に住み、毎日ご馳走をたらふく食べてぜいたくに暮らしていました。一方、金持ちの玄関先にはラザロという貧乏人が寝ていました。彼は病気で、体中にできものがあり、その膿をなめに野良犬がやってきてペロペロなめました。ラザロは、金持ちの残り物でも食べたいと思い、玄関先にいたのですが、金持ちには爪の垢ほども情けの心がありませんでした。ある日、とうとうラザロは死んでしまいました。神のみ使いがラザロを天国に連れていきました。「ラザロ」という名前には（神が助けである）という意味がありました。そして金持ちも、ある日死にました。豪華な葬式がもたれました。しかし、金持ちは死後、「黄泉というところ」にいきました。燃える火の苦しみの中から目と目を上げると、はるか遠くにアブラハムとラザロが見えました。金持ちは「父、アブラハム様、私を助けて下さい！熱くて苦しくてたまりません。どうか、ラザロをこちらに送って私の舌を冷やすようにして下さい」と叫びました。すると、ア

ブラハムは言いました。「思い出してみよ。あなたは生きて
いる間、ぜいたくに暮らし、ラザロは住む家もなく、食
べるものもなく暮らしていた。しかし彼はそんな中、神様
の助けを信じ続け今は慰められ、あなたは火炎の中で苦し
みもだえている。そればかりか私たちとあなたがたの間に
は大きなへだたりがあつて、こちらからあなたのところ
に行くことはできないし、そこからこちらに来ることもで
きないのだ」と。

どうしたら天国にいけるの？

金持ちは「アブラハム様、お願いします。わたしの父の
家にラザロをつかわしてください。わたしには五人の兄弟
がいます。こんな苦しい所へ来るのではないよう、警告し
てやってください」と願いましたが、アブラハムは「彼ら
にはモーセと預言者とがある」と答えました。これは、
「地上の人間には聖書が与えられている。生きている者は
聖書から天国に行く方法を知ることができる」という意味
です。金持ちは「いえいえ、もし、死人の中からだれかが
兄弟たちの所にいつてくれるなら、彼らは悔い改めるでし
ょう」と言い、アブラハムは「もし、聖書の教えに耳を傾け
ないなら、たとい死人の中からよみがえってくる者があつ

ても、聞き入れはしない」ときっぱり答えました。

イエス様のお話から、あなたは何を聞きましたか？人間
はこの世に生きている間にイエス様を信じて天国にいく備
えをしておかないと、死んでからではだめだ、ということ
です。この世でたとえどんなであつても、大切なのは主を
信じる「心（信仰）」なのです。

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」（Ⅱ
コリント6・2）。今、私たち一人ひとり神様の前に立
たされているのです。二千年前、神のひとり子イエス様は、
私たちを罪と滅びの中から救い出すため、この世にきてく
ださいました。そして、私たちの身代わりとして十字架に
かかり死んでくださり、三日目によみがえり、永遠の命を
与え、信じる者には天国に行ける保証を下さったのです。
いつ死ぬかは、誰にもわかりません。子どもがみんな大人
になるとも限りません。大切なことは、今、イエス様を信
じ、天国の約束をいただくことです。さあ、心を開いて、
イエス様を心にお迎えしましょう。

♪さあ、イエスさまを信じましょう♪

（ホーリネス子どもさんびか 60）

聖書 ルカ17・11～19 テーマ 恵みへの感謝

序論

(福井文彦)

ルカ独特の記事で、当時、この重い皮膚病は恐ろしい病氣とされていました。その重い皮膚病の人、十人をイエスがいやされました。ところが、そのことをイエスの所に帰って来て感謝したのは、九人のユダヤ人ではなく、サマリヤ人ただ一人だけでした。

一、主にいやしを求めた

イエスはエルサレムに行かれるとき、サマリヤとガリラヤとの境に沿って東に向かわれました。そのイエスがある村に入られるとそこにいる十人の重い皮膚病の人たちに出会われました。当時、重い皮膚病にかかった人は、(彼らは遠くの方で立ちとどまり)とあるように、律法によつて一般の人々に近づいてはならないと決められていたのです。そのために、「汚れた者、汚れた者」と叫んで、人が近づくのを防がなければなりませんでした(レビ13・45～46)。

ですから、重い皮膚病の人ほど孤立無援なものはいな

かったのです。ところが、16節で明らかのようにその中に一人のサマリヤ人がいました。ユダヤ人とサマリヤ人は本来犬猿の仲で、敵対していました。しかし、重い皮膚病ということで社会から疎外されているという同じ境遇のために、一緒に過ごしていたのです。

彼らはイエスにお出会いすると、このお方なら何とかしてくださるに違いないと信じました。それで、声を張り上げて「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」と哀願したのです。

二、見ないで信じる信仰

たぶん彼らは、イエスがそれまでに病人に手をつけていやされたことを聞いていたと思います。ところがイエスは、彼らをごらんになって不思議なことを言われたのです。(祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい)と。

普通なら、まず、重い皮膚病がいやされるのを見て、祭司がきよめの儀式をします。それがすむと、はじめて彼らは一般の人との共同生活、すなわち社会生活が許され、営めるようになるのです。ところがこの時には、重い皮膚病はいやされていませんでした。それなのに、イ

イエスは〈祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい〉と言われたのです。何とも不可解な命令です。

この重い皮膚病の十人は、「イエスが、〈祭司たちのところに行つて〉、と言われたのだから、必ず道の途中でいやされるに違いない」と、見えるところによらないで主の言葉を信じたのです。そして、イエスが言われた通りに従いました。すると、〈行く途中で彼らはきよめられた〉のです。

重い皮膚病がいやされたことをお互いが確認した時、彼らは嬉しくて嬉しくて跳び上がって歓喜したことでしょう。

三、恵みへの感謝

これらの十人の重い皮膚病の人のうち九人は、いやされたことを喜びながらも、いやしてくださったイエスに感謝するために帰って来ませんでした。病気がいやされるという外側に表われた奇跡は、彼らの救いとはならなかったのです。

ところが、〈そのうちのひとりには、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。これはサマリヤ人であった〉。サマリヤ人だけは、祭司のもとに行つて

きよめられた証明をしてもらう前に、イエスの所に帰つて来しました。

そして、感謝にあふれて「いやし」よりは「いやし主」、「賜物」よりは「与え主」と、イエスのもとに帰つて来て、大声で神をほめたたえました。すなわち、神に栄光を帰し、遜_{ひか}つて主の霊の恵みを受けるために心を開きました。ここに〈ひれ伏して〉とありますが、これは「自分の一生を神にささげる」という決意の表明です。

するとイエスは、〈立つて行きなさい。あなたの信仰があなたを救つたのだ〉と言われました。今や彼は、重い皮膚病がいやされる以上に大切な魂の救いをいただき、新しい人生を歩み出したのです。

結論

クリスチャン・ライフの特徴は感謝です。サマリヤ人のように主イエス（十字架）によって罪を赦_{ゆる}され、きよめられた私たちは、永遠なる究極的救いの恵みに生きる者とされたのです。これが純粹な感謝のゆるがない根拠です。すなわち私たちは聖霊とみ言葉により、環境の変化によって左右されない恵みへの感謝に生きる者とされたのです。

研究資料

(小平徳行)

重い皮膚病のいやしの出来事であるが、ユダヤ人とサマリヤ人の姿勢を対比する事により、神の求めている信仰がどういうものであるかを教えている。

テキスト

11 エルサレムへ行かれるとき ルカ9・51からはじまるエルサレムに上る旅の途中。サマリヤとガリラヤとの間を通られた ガリラヤはユダヤ人が住み、サマリヤはサマリヤ人が住む地域であり、両者は互いに敵同士だと思っていた。この表現からは、サマリヤとガリラヤの境界線に沿って通ったと考えられるが、境界線を横切って渡ったと考えることもできる。

12 彼らは遠くの方で立ちどまり 重い皮膚病にかかった人は、律法によって、他の人と一定の距離を保たなければならぬ。また、自ら「汚れた者、汚れた者」と叫んで、人が近づくのを防がなければならなかった(レビ13・45〜46)。16節で明らかにされるが、十人の中にはサマリヤ人もいた。ユダヤ人とサマリヤ人は犬猿の間柄であるにもかかわらず、彼らは重い皮膚病ということ

社会から疎外されていた共通の境遇のゆえに、一緒に過ごしていたのである。

14 祭司たちのところに行って、からだを見せなさい 重い皮膚病の人が、きよめられたと認められるための一般的な手続き。この病はきよさに関わることゆえに、その患部が本当に治ったかどうか確かめるのは祭司であった(レビ14・2〜20)。イエスは、あたかも治っているかのように行動することを命じることによって、彼らの信仰を試した。十人のうちにはサマリヤ人もおり、サマリヤ人にはゲリジム山に聖所があり祭司がいた。したがってエルサレムの神殿に行く者と、ゲリジム山に行く者に分かれたであろう。行く途中で彼らはきよめられた。彼らがイエスの言葉に従った時、いやしの奇跡は起こった。かつてナアマンの重い皮膚病がきよめられた時も、信じて従うことが必要だった(列王下5・14)。同様に、この十人が、きよめられる前から祭司のもとに向かったのは、見えるところによらず主の言葉を信じたからである。彼らにはこのような信仰があった。その信仰によって彼らはいやされたのである。

15 そのうちのひとりとは、…大声で神をほめたたえなが

ら帰ってきて 彼が神をほめたたえたことは、彼がいやされたことが神のみわざであると理解したこと、このことをすべての人に喜んで知らせようとしたことを示している。十人の群れは病であった時は一つになっていたが、いやされた後は、ユダヤ人はユダヤ人、サマリヤ人はサマリヤ人に分離してしまった。

16〜18 ひれ伏して 礼拝の姿勢を意味する。ほかの九人は、どこにいいのか この九人はユダヤ人であったと思われる。この他国人 聖書中ここにしかでてこない言葉で「ほかの生まれ」という言葉。異邦人改宗者はエルサレム神殿の一番外側まで近づくことができるが、その先は入れない。そのことを禁じるために、そこに立てられている立て札にこの言葉が使われていた。エルサレム神殿の神の恵みの中に入ることが許されているユダヤ人は、帰って来なかった。この神の恵みに近づくことを許されない「この他国人」ひとりだけが、神を賛美するために戻ってきたのである。ユダヤ人であるイエスが、このサマリヤ人である自分をも顧みて下さったということへの驚きと感動が、この感謝と賛美の背後にあったのであろう。

19 あなたの信仰があなたを救った 病気が治るほどの信仰は、十人が十人とも持っていた。しかし、イエスの御国の力に真にあずかって救われる信仰は、感謝して神をほめたたえるために帰って来たサマリヤ人だけが持っていた。救った 新改訳では「直した」となっているが、直訳は「救った」である。イエスはこのサマリヤ人にいやし以上のことがなされたことを言おうとしたのであるう。

いやしと救いは異なる。いやしの奇跡的な体験は、神を賛美し、イエスのもとに戻ってくるといふ心の中の大転換が起こらない限り、救いには直結しないのである。この心の中の転換をイエスは「信仰」と呼んでいる。九人のユダヤ人は、重い皮膚病がいやされてユダヤ人社会に復帰し、元の生活に戻ただけであった。彼らの姿勢はイエス・キリストの救いに対して示したユダヤ民族の態度にほかならない。これに対し、このサマリヤ人はイエスのもとに来て、新しい人生を歩み出したのである。彼は異邦人クリスチャンの予型であるといえる。

参考図書 11月4日分の他、榊原康夫『ルカ福音書講解』（教文館）

聖書

タイトル

暗唱聖句

ルカ17・11～19

おっと、忘れていませんか？

神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにはいないのか。

ルカ17・18

目標

受けた恵みに感謝し、神をほめたたえる者となる。

導入

(松浦みち子)

誰かに良いことをしていただいた時、なんといいですか？

「アリガトウ！」ですよ。しかし、「のどもと過ぎれば、熱さ忘れる」ということわざがあります。どんな熱いものも飲み込んでしまえば熱さを忘れてしまうように、苦しみや悩みで必死に助けを求めた場合でも、苦しみが過ぎ去ってしまふと、その辛さを忘れ、また助けられたことを感謝することも忘れてしまふ、という意味です。皆さんはどうでしょうか？

十人の病人たち

ある村に、重い皮膚病を患った十人の病人がいました。この人たちは、村を通られるイエス様に出会い、遠く離れ

たところから大声で叫びました。「イエスさまー!! わたしたちをあわれんでくださいー!」。叫び声をあげる彼らをご覧になったイエス様の心には、この病人たちの悲しみや苦しみが痛いほどわかりました。「祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい」とさっそく言われました。みんなはびっくりしました。重い皮膚病が治つてもいいのにどうして祭司のところに行けるでしょう。当時、重い皮膚病の人たちは、病気が治ったら祭司のところに行き、体を見せて点検してもらい、確かに治つたと認めてもらう必要があつたのです。

しかし、イエス様のお言葉です。彼らは走つて祭司のところに行きました。あらつ、フシギです! 走っていくうちに体は軽くなり、重い皮膚病の醜いだれはなくなり、赤ちゃんの肌のようにすべすべになりました。彼らは天にも昇るような気持ちになつて、「やったあー。治つたぞおー。早く祭司に見てもらつて家に帰ろう」と口々に叫びながら町にはいつて行きました。

もどってきた人

おつとつと! 十人の中の一人が、顔を輝かせてイエス様のところへ引き返してきました。その人は病気が治つたの

で、嬉しくて嬉しくてたまりません。大声で神様をほめた
たえ、「神様はなんてすばらしいかただろう。ハレルヤ！
ハレルヤ！」と叫びながら戻ってきて、イエス様の足元に
ひれ伏しました。そして、「イエスさま、ありがとうございます
です！」と心の底から感謝を言いました。その人は
サマリヤ人でした。イエス様はとてもお喜びになりました
が、ちよつとさびしそうでした。「病気が治つたのは十人
ではなかったのか。他の九人はどこにいるのか。神をほめ
たたえるために帰ってきたのは、この外国人しかないの
か」。それから「立つて行きなさい。あなたの信仰があな
たを救つたのだ」とおっしゃいました。

感謝が神の栄光となるために

九人の病人たちもサマリヤ人と同じように病気が治つた
ことを喜んだことでしょう。しかし、神様に栄光を帰した
のは一人だけでした。イエス様はこのことを大層喜ばれま
した。

ここに私たちに対する大切なメッセージが隠されていま
す。あなたは真剣に祈つて祈りがきかれたことがあります
か？その時どうだったのでしょうか。「よかった、よかった」
とお祈りがきかれたことを喜んだだけでしょうか？神様に

栄光をお返ししましたか？

小4で洗礼を受けたある男の子は、小さなことにも神様
に感謝を表しました。遠くの大学に行っている兄弟が久し
ぶりに帰ってきて家族全員で礼拝を守った時、「家族そろつ
て礼拝が守れたこと感謝」、「なくなった鍵が見つかったこ
と感謝」、「病気のおじいちゃんをお見舞いできたこと感謝」
など。献金袋の感謝献金の項目にはさまざまな感謝が満ち
あふれています。私たちは毎日必要なものを与えられてい
ますね。お願いばかりでなく、神様に心からアリガトウと
感謝を言いましょ。そして何よりもイエス様が十字架に
かかって救いの道を開いて下さったこと、信じるだけで救
われ天国に行けることを心から感謝しましょ。

「すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵
みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の
栄光が現れるようになるためです」（Ⅱコリント4・15
新改訳）。み言葉のように感謝が満ちあふれて、神様の栄
光となるように、主をほめたたえるものとなりましょ。

♪みんなでたたえましょ♪

（ホーリネス子どもさんびか 2）

聖書 ルカ3・1〜6 テーマ 主の道を備えよ

序論

(金井信生)

イエスの働きが始められる直前、預言者ヨハネが活動を始めます。旧約時代、多くの預言者が、悔い改めて神に立ち帰るように神の言葉を語り続けてきました。ヨハネは預言者の系譜の最後に位置づけられる人です。

一、神の時

イエスの誕生の記事は、ローマの初代皇帝アウグストの勅令から始まりました。ヨハネは、その次の皇帝であるテベリオの治世に預言者として立ち上がりました。

ユダヤの国は四つに分けられ、中心部はローマが派遣する総督が治め、周辺の地域はこれもローマが任命する領主が支配する体制が築き上げられていました。

宗教的には、本来一人しかいないはずの大祭司が、〈アンナスとカヤバ〉の二人の名が記されていることから、正常とはいえない状況であったことがうかがわれます。

ここに出てくる人名の多くが、イエスの働きの中に登場します。特に十字架直前には、それぞれの行動や発言がどこから出たのが、ここでの紹介に結びついてきます。

この時代に、〈神の言〉がヨハネに臨みました。ヨハネは〈荒野〉にいました。世の中が移り変わっても変わることのないところで静かに神と交わり、神の言を聞いて、ヨハネはメシアの先駆者として立てられます。神によつて建てられ、治められるべき国が、人間の思いに振り回されて混沌としている中、神は言をもつて救いの計画を進めて行かれます。

二、ヨハネの使命

ヨハネは、神の怒りが迫っていると告げます。神が怒られたら国がどのようなになるのか、ユダヤの民は何度も経験してきています。

救いは神の憐みによるものですが、救われるためには、まず自分が憐みを受けなければならないほど、みじめな者であり、そのままでは滅ぶほかにないことを知らなければなりません。

ヨハネは、悔い改め、水のバプテスマを受ける者には、罪のゆるしが備えられていることも約束し、バプテスマを受けるように勧めました。

バプテスマは、ただ心に反省を持つだけでなく、生き方を改めることを意味します。これまでの自己中心的な生き方から、神を愛し、神に喜ばれる生き方へと方向転換するからです。

さらにヨハネは11節以下に、具体的なアドバイスを与えます。そこには、お金や持ち物に心が支配されないように、また誘惑に陥らないようにと命じられています。

《悔改め》が人を救うのではなく、キリストを人生の主として、その導きに従い、《主の道》を共に歩む新しい生き方が救いなのです。

三、神の救いを見る

ヨハネはメシヤ（救い主）の先駆者として、主の道を備えました。ただヨハネだけが備えたのではなく、一人一人が、主を迎える心備えをするように導きました。

神の時がいつ来るか、神の働きがどのように進められるかは、私たちには分かりません。こちらで決めたり、

指図するとしたら、神と人の関係がひっくり返ってしまいます。

私たちがなすべきことは、主がいつどのように働かれても、主の道に歩むように備えておくことです。

ヨハネは主の道を備えるために、困難に立ち向かいしました。《谷》差別されて希望を失っている人たち、《山と丘》はおごり高ぶって勢力争いをしている有力者たち、《曲がったところ》は真理を失ってどちらに進んでいるのかわからない人間の状態、そして《わるい道》となつて、とても尊い方をお迎えない状態です。

引用されているイザヤ書40章は、バビロン捕囚からの解放を預言する、イスラエルの民に向けての預言です。しかし、ヨハネは、間もなく来られるメシヤは全世界の救い主であり、すべての人に救い主を迎える心備えをせよと、呼びかけています。

結論

クリスマスの備えの時期ですが、目に見えるところよりも、キリストを人生の主としてお迎えするにふさわしく、私たちの心の中を備えましょう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

1～2 皇帝テベリオ在位の第十五年 彼が正式に帝位に就いたのは紀元14年だが、12年からアウグストと共同統治していた。どちらが基準かはつきりしないが、おおよそ紀元27～29年頃のことである。ポンテオ・ピラトがユダヤの総督 在職期間は26～36年。ヘロデガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイツリヤ・テラコニテ地方の領主、ルサニヤがアビレネの領主 ここでのヘロデとは小ヘロデと呼ばれたアンティパスのこと。ヘロデ大王が紀元前4年に没した後、その遺領は三人の息子（アケラオ、ピリポ、アンティパス）によって分割統治された。ちなみにアケラオは、失政を重ねた結果、紀元6年に追放され、その領地（ユダヤ、サマリヤ他）はローマの直轄とされた。なお、ルサニヤはヘロデ家とは無関係の人物である。アンナスとカヤパとが大祭司であったとき アンナスは15年にローマによって大祭司から退位させられ、娘婿のカヤパが大祭司となった。しかしユダヤの律法では大祭司は終身職であり、同胞たちからはカヤパと共にアンナスも大祭司と見なされ、強大な

権力を保持し続けていた。神の言が荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ 預言者の先人たちと同様に、ヨハネが語るのは自分の言葉ではなく主の言葉であった（エレミヤ1・2他参照）。

3 ヨルダンのほとりの全地方 ヨルダンは出エジプトの旅の終わり、約束の地への入口であり（ヨシユア3、4章）、イスラエルの救いの歴史を思い出させる場所であった。

罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを宣べ伝えた 悔改めはユダヤ人も罪を犯したときに行ったが、バプテスマは異邦人のみに課された行為であった。彼らはユダヤ教に改宗する際に、指導者の監督の下、汚れをきよめる行為として自分自身を水に浸したのである。しかしヨハネはユダヤ人にもバプテスマを要求した。そのことによって、全ての人が神の招きに対し主体的に応答しなくてはならないことを示したのである。アブラハムの子孫であることは何の意味も持たない（8）。悔改めなくして誰も神の国の恵みにあずかることはできないのである。このヨハネによる水のバプテスマが、人間の側の悔改めを示すものなのか、その悔改めに対する神からの答としてのきよめを表すものなのかは、判断が難しいところである。しかし従来のバプ

テスマがその人の行為であったのに対し、ここではバプテスマを「宣べ伝え」、「授ける」(16)という能動的な役割がヨハネに与えられている。そのことから判断するに、後者と捉える方がよりふさわしいだろう。なおヨハネは「(自分) よりも力のあるかた」(16)への言及を通して、そのような終末的なきよめの全てを彼自身がもたらすのではないことをはっきりと示した。ヨハネのバプテスマは、救い主であるイエスの登場を予告し、イエスが実現する聖霊と火によるバプテスマ(16)のための準備をするものであったのである。

4 預言者イザヤの預言の書 イザヤ40章は、出エジプトを念頭に置きつつ、直接の言及はバビロン捕囚についてであるが、ヨハネによるこの引用は、それらが、神が再びご自身の民を救ってくださる新しい出エジプトを予表するものであることを示している。**荒野で呼ばわる者の声がする** ヨハネこそが、救い主の到来を告げる神から遣わされた布告者であった。**主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ** イザヤは、荒野からエルサレムへのまっすぐな道を備える必要性を語った。主はそこを通過して救いをもたらされる。その道を建設することは、一人一人が救い主を受け

入れるために準備を整えねばならないことを示している。**5 すべての谷は埋められ、すべての山と丘とは、平らにされ、曲ったところはまっすぐに、わるい道はならされ「平らにする」**(ギタペイノオー)には「へりくだらせる」、「曲がった」(ギスコリオス)には「怒りっぽい」の意味もある。主の道を備えることは、謙遜、柔和といったキリスト(者)の徳と深い関わりを持つものなのである。

6 人はみな神の救を見るであらう イザヤ40・6のギリシャ語訳聖書(七十人訳)からの引用。ヘブル語聖書で「これ」(その前の「主の栄光」を指すのだろう)とあるところが、「神の救」とはっきり示されている。前章でイエスの中に「あなたの救」(2・30)を見たシメオンは、「この救は：異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」(2・31〜32)と語った。全ての人がその救いを見ることがするのである(使徒28・28参照)。それはイエスの登場と宣教を通して実現するのであり、イエス的人格との密接な関係を持って理解されるべきものである。

参考図書 10月28日分と同じ。

聖書

ルカ3・1〜6

タイトル

大切な準備

暗唱聖句

主の道を備えよ、その道筋をまつぐにせよ。
ルカ3・4

目標

キリストを心にお迎えするにふさわしく備える者となる。

導入

(飯田勝彦)

今年もあと1ヶ月となりました。今日からイエス様の誕生を待ち望むアドベントに入ります。ローソクにも一本、火が灯りました。ローソクの火が増えるごとにクリスマスが近づきます。皆さん、ワクワクしませんか。

皆さんは、新年を迎えるための備えとして、大掃除をするでしょう。では、クリスマスを迎えるための大切な備えとはどんなことでしょうか。①クリスマスプレゼントの希望を親に言うておく。②せっかくのクリスマスを楽しむために、風邪を引かないように気を付ける。…さて、どちらでしょう。実は、どちらでもありません。

クリスマスに向けて大切な備えをしましょう。

主の備えをしたバプテスマのヨハネ

イエス様のお母さんの名前は何でしたか？マリヤです。

そのマリヤの親類にエリサベツがいました。彼女にはヨハネという子がいて、その子が今日登場するバプテスマのヨハネです。

彼はちよつと変わった生活をしていました。生活場所は、誰もいない荒野です。服は、らくだの毛を身にまとい、腰には皮の帯を締め、食事はいなこと野蜜を食べる、ということもワイルドな生活をしていたのです。

それには、ちゃんとした理由がありました。彼は、神様からイエス様が来られるための道備えをするという大切な使命が与えられていたからです。何とそれは、イエス様が生まれる約七百年も前から神様によって約束されていたことでした。

バプテスマのヨハネは、救い主であるイエス様の道を備えるため、多くの人たちに「わたしよりも優れた方が来られます。悔い改めてバプテスマを受けなさい！」と知らせて廻ったのです。

皆さんは、トンネルがある山道を通ったことがあるでしょう。あのトンネルは、自然に穴が開いてできたものではあ

りませんね。ちゃんとトンネル工事をする人たちが様々な機械を使い、汗水の働きの結果です。それは、道を通して私たちの生活が少しでも便利になるためです。山の中や、いろいろな所に道を作ることは大変なことです。

それと同じように、バプテスマのヨハネも、イエス様の来られる道を備えることは大変、だつたに違いありません。しかも、目に見えない心の備えです。彼の聞いた言葉をみんなが信じたわけではないでしょう。なかには「そんな嘘を言うな！」とか、「悔い改めろだ」と、お前は何様だ！」と、ヨハネに文句を言う人もいたと思います。でも彼は、へこたれることなくイエス様の来られる道備えをしたのです。

キリストを迎える備えをしよう

バプテスマのヨハネの言葉を受け入れた人たちはみな、罪を悔い改めてバプテスマを受けました。

このバプテスマのヨハネの言葉は、皆さんにも語られるのです。皆さんは、心にイエス様を迎える準備はできていますか。イエス様は、イエス様を心に迎える人の心を、愛に満ちた心にしてくださいます。その心には、喜びと優しさで平和で満ちています。心が愛で満たされている人は、

その愛を多くの人に与えて行くことができます。皆さんは、愛の心で満たされることを願いますか。

イエス様を迎えるための準備があります。それがバプテスマのヨハネが言った、悔い改めなのです。イエス様は、罪を嫌われます。また、イエス様は聖いお方なので、罪と仲良く心の中に住むことができません。ですから、私たちがイエス様を心にお迎えするため、心にある罪を悔い改める必要があります。イエス様は、その罪を告白することを助けて下さいます。そして、その罪を赦し、私たちの中に入って下さるのです。

まとめ

イエス様をお迎えするためにお祈りしましょう。「イエス様、僕はあなたを心にお迎えして、愛の心にして欲しいです。どうか僕の心にある汚い罪を赦してください。嘘をついたこと、悪口を言ったこと、友だちと喧嘩したこと、友だちのものを盗んだことなど、悔い改めます。イエス様、お許しください。アーメン」。

♪イエスさまはよんでいる♪

(ホーリネス子どもさんびか 56)

聖書 IIコリント8・1～15 テーマ キリストの恵みを知って

序論

(金井信生)

キリストは神の御子でありながら、貧しい姿をとってこの世に生まれ、その生涯を送られました。クリスマスに、その恵みによってどれほど豊かな者とされているかをおぼえましょう。

一、主は富んでおられた

キリストが天において、いかに富んでおられたかは、聖書の中で様々に示されています。

コロサイ書では、万物は御子にあつて造られ、御子は万物の支配者であり、主権者また所有者であることが記されています。

預言者イザヤは、神殿で神の臨在に触れて圧倒されました。使徒ヨハネは福音書に、イザヤはイエスの栄光を見たと言明かしています。

イザヤは御使が主を賛美している姿を見ましたが、イエスが誕生した時にも、羊飼いの前におびただしい天の軍勢が現れました。多くの御使が賛美し、仕えているの

がキリストの天における姿です。

〈主は富んでおられたのに〉とパウロは記しますが、その富の大きさは言葉に尽くせません。人間の富は計算や比較の対象になりますが、神ご自身の富は、少しの不足もないという、全く別の尺度です。ただ私たちにわかるのは、その無量無限のお方が、私たちと同じ姿をとり、貧しさを知ってくださいただということだけです。

二、主は貧しくなられた

キリストは徹底して〈貧しくなられた〉お方です。無力な赤ん坊として、小さなベツレヘムの村の家畜小屋に生まれます。両親のヨセフとマリヤは、神殿で本来定められている羊ではなく鳩をささげているくらい、貧しい生活を送っていました。イエスの少年時代はヨセフに仕えて働き、公生涯に立たれてからも、身なりや持ち物において、一切人をひきつけるものは持たれませんでした。キリストが貧しくなつてくださったとは、私たちと同じ、弱さや不足を持つ人間になった、あるいは、物質的な貧しさを経験されたというだけではありません。

天において仕えられていたキリストは、人となられて仕える者になりました。神の子として持つ力も知恵も、

自分を助け守るためには一切用いず、乏しい人にただ与えるばかりで、最後には命まで与えられました。十字架に至る最後の時には、自分の思いも願ひも天の父に委ね、人々のねたみと憎しみと怒りに身を任されました。

創造主が被造物の姿をとり、礼拝されるべき方が僕となつて仕え、与え尽くされた、その徹底した謙遜の姿がわたしたちを救う貧しさなのです。

三、富む者になるため

もし私たちが、何を富とするかで、世の人と同じ基準を持つていたら、キリストが貧しくなつてくださった意味を知らず、恵みをもたないままです。いつまでも満足することを知らず、比較と競争の世界にとどまるだけです。

パウロは〈マケドニアの諸教会に与えられた神の恵み〉を、コリントのクリスチャンたちに知らせようとしてます。その恵みとは、お金でも物でもありません。

マケドニアの信徒たちは、患難のために激しい試練を受け、極度の貧しさの中にあります。それでも、キリストの救いによつて喜びが満ちあふれ、さらに困っているエルサレムの教会のために献金に加わることも恵みと受

け止めています。

この世で富んでいる人も貧しい人も、神の恵みを知らなければ、みな霊的に貧しい者でした。どんな生活を送つていても、最後は永遠の滅びしかありませんでした。

キリストが自ら貧しくなられたのは、私たちを罪と滅びから救い、神の恵みに富ませるためです。心も生活も清くし、永遠の命に生きる霊的な豊かさを与えるためです。

クリスマスは、神の独り子がこの世に生まれてくださったことを喜び祝うだけでなく、キリストに従い、共に生きる決心をするときです。神の愛とキリストの恵みに感謝し、この世が与えることのできない霊的な豊かさを互いに与え、喜びと希望、感謝が絶えない、霊的に豊かな歩みに導いていただきましょう。

結論

クリスマスは、キリストが私たちのために貧しくなつてくださったことをおぼえる時です。この恵みを感謝し、人に仕える者となりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 マケドニアの諸教会 ピリピ、テサロニケ、ベレヤ等の諸教会のこと。恵み[キ]カリス この言葉は、本日の箇所全体を理解する上で非常に重要な語句である。カリスは、他の箇所では同じ意味で2カ所(4、9)、ほかに「募金」(6)、「恵みのわざ」(7)といった形で訳しかえられている。もともこの言葉は、秩序、美しさを意味する言葉である。しかし、のちにはそれらの素晴らしいものを他の人に与えようとする願望へとつながり、ついにはそれらのものを他の人に与える働きへとつながったのであろう。新約聖書では、これはまず「神の」恵みであった(1)。そしてこの「恵み」は、イエス・キリストを通して与えられる「恵み」であった(9)。この恵みに浴した者はこの神に感謝し(16「感謝」は「カリス」)、その感謝は「募金」(6)、「慈善のわざ」(新共同訳)となる。すなわちこの節における「マケドニアの諸教会に与えられた神の恵み」とは、艱難による激しい試練(2)の中でも、彼らの満ちあふれる喜びが、「募金」「慈善のわざ」となっており、ということである。これこそが「神の恵み」

なのである。

3、4 しかも、このマケドニアの諸教会の献金の特徴は、パウロからのすすめではなく、自ら熱心に願ったという点である(3)。**奉仕[キ]ディアコニア、加わる[キ]コイノニア** この箇所においては、「献金」を表すひとつの要素として用いられている。すなわち「献金」とは、神の教会での「奉仕」であり、「恵み」であり、「交わり」を意味するのである。

5 彼らの「献金」の特徴は、その「献身」に表れている。パウロが「わたしたちの期待以上に」(新共同訳)と語っているのは、まさにマケドニアの諸教会のこの献身の信仰である。彼らの献金の姿勢の背後には、彼らの献身の姿勢があった。

6 詳細は1コリント16・1、4参照。コリント教会の信者たちは、この「募金」をすでに始めていたようである。だからそれを完成するようにとテトスを通して勧めたのであろう。**募金[キ]カリス** 恵み。他の聖書では「恵みのわざ」(新改訳)、「慈善の業」(新共同訳)、「人助け」(フランシスコ会)など。

7 ここでパウロは、コリント教会の長所を率直に語る。**信仰 ことば 知識 熱情 愛** これらは、いわゆるカリスマ(霊の賜物)を指しているものと考えられる(1コリント12章参照)。

8 この節からは、献金を完了するようにという勧めがなされる。しかし、パウロはこの勧めを **命令** という形で押しつけるのではない。パウロはマケドニアの諸教会の **熱心さ**（新改訳・新共同訳）を引き合いに出し、コリントの人たちの愛の純真さを確かめようとしているのである。

9 本日の暗唱聖句であり、待降節に聴くべき御言葉でもある。イエス・キリストが「自己を貧しくされたこと」は恵みであり、この「恵み」は、この箇所文脈では、信仰者たちの「献金」を意味している。しかし、彼ら信仰者たちが献金をしてはいられない最も奥深い動機は、豊かであった神の御子が、人間のためにご自身を与え、貧しくなれたという事実である。これこそが、**わたしたちの主イエス・キリストの恵み**なのである。**主は富んでおられた** ヨハネ17・5参照。**あなたがたのために貧しくなられた** イエス・キリストの受肉の事実を指す。以上の「富む」「貧しい」とは、物質的なそれではなく、霊的なそれである。いずれにしても、この箇所の理解のためには、同時にピリピ2・6～11の、いわゆる「キリスト賛歌」を十分に黙想することが必要である。

10～11 直接的には8節から続いている。コリント教会の信者に必要だったことは、命令ではなく励ましであった。なぜ

ならば、コリント教会の人々は、他に先んじてこのことを願っていたばかりでなく、現実に行っていたからである。だからパウロはコリント教会の信者たちに対して、それを成し遂げるようにと勧めるのである。

12 **持っているところ** 力に応じて（3）と同じ意味。

14～15 **今の場合** 2通りの理解が可能である。まず、時間的な理解である。将来彼らが経済的なゆとりを持ち、一方であなたがたが欠乏した時、という理解である。しかし「余裕」「欠乏」を霊的に理解すると、彼らの霊的な豊かさがあなたがたの霊的欠乏を補う、と理解できる。なぜならばコリント教会をはじめとした異邦人の諸教会は、すべての教会の出発点であるエルサレム教会から福音を伝えてもらったからである。だから、コリント教会の霊的な生みの親であるエルサレム教会が金銭的な欠乏の中にある今、金銭的なもので彼らにお返しすることこそが愛の交わりであり、奉仕でもある。このことの裏付けとして、15節では出エジプト16・18の言葉を引用して語るのである。

参考図書 荒井献、H・J・マルクス編『ギリシャ語新約聖書釈義辞典』（教文館）他

聖書

タイトル

暗唱聖句

Ⅱコリント8・1～15

心、豊かにされよう！

主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。

Ⅱコリント8・9

目標

私たちのために貧しくなってくださったキリストの恵みを知り、与える者となる。

導入

(飯田勝彦)

ロウソクに2本目の火が灯され、アドベント第2週に入りました。

皆さんの心は、イエス様を迎える備えが出来ていますか？世間は、クリスマスということで賑やかになっています。皆さんは、イエス様が何のためにお生まれになったのかを、お祈りの中で静かに思う時を持ちましょう。そうすると、クリスマス喜びが一段と大きくなります。

貧しくなられたイエス様

神様は、私たち人間を罪の中から救い出すために人の姿となってこの世に来られました。それがイエス様です。しかし、

イエス様はこの世に来られた時、突然に、しかも最初から大人の姿で来られたではありません。イエス様は、マリアのお腹から赤ちゃんとしてお生まれになったのです。その生まれた場所は、柔らかく温かい布団のあるベッドの上ではありませんでした。なんと家畜小屋で生まれたのです。皆さんは、牛や馬を見学に行ったことがあるでしょう。そこは、さわやかな香りでしょうか？そうではないと思います。決して良い臭いではなかったでしょうね。イエス様は、生まれたとき家畜の餌を入れる飼料葉桶の中に寝かされました。皆さんの中で、「僕は、家畜小屋で生まれ、ベッドは飼料葉桶だった」という人がいますか？また、イエス様は、神様であるのに重罪人が受ける十字架刑を受けられ、そこで死なれたのです。イエス様の生涯は、恵まれた環境の中を歩まれたものではありませんでした。イエス様は、徹底的に貧しくなられ、生まれた時から死ぬまで孤独で苦しい人生を歩まれたのです。

豊かにしてくださるイエス様

どうしてイエス様は、そんなに貧しくなれたのでしょうか。分かる人いますか？

皆さんは、公園でシーソーに乗って遊んだことがあるでしょう。長い板の両端に座る所があり、体重の重い人の方が下に

なり、軽い人の方が上になります。どちらかを地面に近づけると、片方が上にあります。

イエス様が神様でありながらも家畜小屋で生まれ、十字架の死に至る道を歩まれるほど貧しくなられたのは、皆さんを豊かにするためだったのです。

聖書には、私たちすべての人間は罪人であると記されています。皆さんの心の中に誰にも見られたくない思いや考え、誰にも知られたくない行いはありませんか。私たちの心の中に罪があるなら、それは豊かではなく貧しい心です。心が貧しければ心はいつも苦しく、人や自分に対して優しくできず、相手を傷つけてしまいます。でもイエス様は、私たちが抱える全部の貧しさを背負ってくださったのです。

私たちがこの貧しくなられたイエス様を救い主として心に迎えるとき、私たちはイエス様によって豊かな者にされるのです。

与える者にしてくださるイエス様

少し考えてください。テーブルの上に空のコップがあるとします。そのコップに水を注ぎ続けたらどうでしょう。コップは徐々に水で満たされて行きます。さらに水を注ぎ続けると、水はコップをいっぱい満たし、こぼれて周りに流れて

行くでしょう。

そのようにイエス様によって心に豊かにされた人は、その豊かさが自分だけでとどまらないで周りに流れて行くのです。私たちの心を豊かにするために、貧しくなられたイエス様を信じ続ける人の心には、イエス様の喜びと愛が注ぎ続けられます。

もし、皆さんのお父さんやお母さん、友だちに喜びと愛が皆さんを通して流れて行き、周りの人が豊かな心にされたらどうでしょうか。嬉しいと思いませんか。イエス様は、皆さんを豊かにするだけではなく、その豊かさをどなたかに渡すことのできる人に変えて下さる神様なのです。

まとめ

私たちを豊かにするために、貧しくなられたイエス様を思いながら一週間を過ごしましょう。そして、イエス様によって豊かにされ、それを多くのお友だちに与えて行く者にされましょう。

♪まぶねのなかに♪

(ホーリネス子どもさんびか 49)

聖書 マタイ1・18〜25 テーマ 救い主としての誕生

序論

(金井信生)

キリストとは「救い主」という意味ですが、イエスは
その教えや奇跡、あるいは十字架の死や復活によって救
い主になられたのではなく、初めから救い主として生ま
れた方です。

一、救い主としての誕生

ヨセフは、婚約していたマリヤが身重であると聞いて、
〈ひそかに離縁しようとした決心〉しました。しかし、主の
使はヨセフに、〈マリヤの胎内に宿っているものは聖霊
によるのである〉ことを告げました。また、〈その名を
イエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろも
ろの罪から救う者となるからである〉とも告げます。

「イエス」という名前自体は、旧約のヨシヤを受け
継ぐもので、「主は救い」という意味です。当時はあり
ふれた名前の一つであり、救い主の到来を待ち望む思い
を込めてつけられていました。

しかし、御使いの言葉は、親の願いを込めて生まれた

者や、人の期待を受けて誰かが救い主になるのではなく、
神の御計画の中で救い主がこの世に生まれることを示し
ています。

この章の初めの系図にあるように、人は誰でもアダム
以来受け継がれてきた、命の系譜の中に生まれてきます。
しかしキリストは聖霊によって、つまり神の特別な働き
によって生まれてくるのです。ヨセフは旧約の信仰者た
ちにならない、自分の思いを置いて神のなさることに委ね
従いました。

二、罪からの救い主

旧約時代から待ち望まれていた救い主は、大国に圧迫
され、支配されることの多かったユダヤ人にとって、独
立を回復する政治的な王として期待されていました。ま
た、半分離邦人の血が入っているヘロデ王ではなく、ダ
ビデ王の子孫が王となり、国中が神を畏れるようになる、
宗教的な国家の確立を期待する人たちもいました。

しかし、主の使は救い主を〈おのれの民をそのもろも
ろの罪から救う者〉と呼んでいます。ユダヤ人は神の民
と自称していても、神の目からは罪ある存在です。自分
が神の前に清いのか汚れているのか、神との関係が正し

くあるのか、きちんと解決されていないのに、自分の思いを神の前に押し通そうとしていました。

もちろん、ユダヤ人だけに罪があるわけではありません。ユダヤ人は全世界の人々のモデルとして、まずまことの神を知る民とされました。世界中のすべての人が、神に対して同じように罪がありますから、キリストは全人類に対して「罪から救う者」と呼ばれているのです。

また、系図の中にすでに人間の罪が見え隠れしているように、普通の誕生では罪の中に初めから生まれているので、罪から救うことができません。聖霊による誕生は、私たちを罪から救うために、罪と無縁の方が罪の世に生まれてくるための特別の手段でした。

三、われらと共にいます

23節には、「イエス（主は救い）」と名づけられたのは、「その名はインマヌエル（神われらと共にいます）」と呼ばれるであろう」とのイザヤ書の預言の成就であると説明しています。罪から救われた者は、神が共におられることを喜ぶ者へと変えられるのです。

罪とは、神を忘れて自分の思いに従う心そのものであり、またその心のままに歩む生き方です。その結果、過

ちや傷を繰り返すだけでなく、神との関係が断ち切られています。

罪から救うために生まれたキリストは、やがて十字架にかかって全人類の罪を身に負って死なれます。これは神の愛と、完全な罪の赦し（ゆる）が世に示されるためでした。キリストが罪を赦し、救われるのは、私たちを神のもとに立ち帰らせ、神との正しい関係に歩ませるためです。

人口調査の対象にもされない羊飼いの、異邦人の博士たちも、そして病などのために「汚れた者」と扱われて、神の存在が遠かった者にも、キリストのその姿で、言葉で、行動で、神がわれらと共にいてくださることを現されました。そして、感謝と希望をもって神を賛美する者と変えられる救いを与えられました。この救いが今の私たちにも与えられているのです。

結論

私たちも、救い主として誕生されたキリストを信じ、罪が赦され、神の子としていただいた幸いを心から喜びましょう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

18 イエス・キリストの誕生の次第 「誕生」は〔ギ〕ゲネシス(他に起源、家系などの意も)。ちなみに1節の「系図」はその〔ギ〕ゲネシスの「書」(〔ギ〕ビブロス)。その系図(1〜17)の焦点であったイエスの誕生の詳細がここから語られる。婚姻 いくつかの制限を除いては夫婦と同等に見なされる公式な関係(夫、妻という表現はそのため)。その制限の一つは性的関係を結んではならないこと。一般に一年ほどの婚姻期間を経て正式な結婚へと進んだ。その間に女性が他の男性と関係を持てば姦淫(かんいん)と見なされた(申命記22・23以下)。一緒にならない前に 正式な結婚へと進む前。聖霊によって身重になった 神的存在が人間と関係を結ぶという異教的な概念はここにはない。むしろ1、18節で用いられている〔ギ〕ゲネシス(創世記の意も!)が象徴的に示すのは、神の創造のわざがマリヤの胎内にあらわされたということ。世界の創造のときと同じように、新創造(すなわち救いのわざ)に際しても聖霊が働かれるのである。なお、聖霊による受胎(18、20)の「くによって」を表す前

置詞〔ギ〕エクは、1〜17節の系図においても、「ボアズはルツによるオベデの父」(5)のように、その中に登場する四人の女性と共に用いられている。このことから、マタイは「ヨセフは聖霊によるイエスの父」と言いたかったのだと主張する注解者もいるが、あながち的外れでもないと思う。ヨセフがイエスの父というのは名ばかりのことでは決してない。ヨセフはその従順な信仰によって、イエスの単なる名目上の養父ではなく、彼にダビデの子孫としての地位を与える重要な役割を果たす、地上での父親とされたのである。

19 正しい人であったので、彼女のことを公けになることを好まず 「正しい」(〔ギ〕デイカイオス)は律法に対する正しい態度を指す語。律法に忠実であろうとすれば、マリヤの姦淫の容疑を世に明かし、彼女は裁きと処罰を受けねばならない(石打ちの刑。ただし当時それほど厳格には適用されていなかったようである)。ヨセフはマリヤをさらし者にしたくなかった。とはいえ、明らかに有罪と思われるマリヤを妻に迎えるならば義が通らない。その葛藤の中で到達した答が、ひそかに離縁 すること。マリヤの同意さえあれば一人の証人の前で公式に離縁することが可能で

あつたのである。このようなヨセフの葛藤^{かつとう}の姿は、律法に基づく神の前での正しさと、慈しみに富んだ隣人に対する優しさを同時に示すものであつた。

20 **ダビデの子ヨセフ** 新約でダビデの子という表現がイエス以外に用いられるのはここだけ。

21 **その名をイエスと名づけなさい** イエス^{〔ギ〕}イエス^スは、^{〔ヘ〕}イエシユア^{〔ヨシユアの短縮形〕}のギリシャ語読み。**おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる**

その名は「主は救い」の意。救い主に対する当時の一般的な期待は、政治的な救いであつた。しかしイエスがもたらす救いは「そのもろもろの罪から」の救いなのである。

22 **主が預言者によって言われたことの成就するため** 神

が預言者を通して語られた救いの計画の成就として、救い主は誕生する。続く節はイザヤ7・14の引用。メシヤ預言には、それが第一義的に指し示すもの（ここでは、アハズに語られた当座の救い）と、究極的に指し示すものがある。その究極的な約束が、今まさに成就するのである。

23 **おとめがみごもつて** ^{〔ギ〕}バルセノスは「処女」の意だが、イザヤ書の^{〔ヘ〕}アルマは「若い女性」の意。よつてこの預言は処女降誕を意味するのではないと主張する者もある

が、その預言の究極の意味での成就を記すこの箇所^{〔ギ〕}パルセノスが用いられ、天使を通してその受胎が聖霊によると断言され（18、20）、さらにマリヤも「まだ夫がありません（直訳は、男の人を知りません）」（ルカ1・34）と語ることなどを総合するときに、マリヤの処女懐胎は、聖書全体がはつきりと指し示すものであると受け止めるのは、当然である。**インマヌエル** 個人的な名ではなく、その役割を説明する称号的なもの。神の御子が人となることによって「神われらと共にいます」という主の臨在が実現する。そしてイエスの名が指し示す主の救いが実現に至るのである。最初の章でインマヌエルという名を伝えるこの書が、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（28・20）との約束で終わるのは偶然ではない。

25 **子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった** 「知る」は性的関係を表す表現。このことは処女降誕の事実をさらに疑いないものとする。

参考図書 注解書 D. A. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), 増田誉雄（新聖書注解）。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ・18〜25

タイトル

イエス様の誕生

暗唱聖句

彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。

マタイ・21

目標

救い主として誕生されたキリストにより、罪赦され、救いを頂く。

導入

(飯田勝彦)

ローソクに3つ目の火が灯されました。いよいよイエス様の誕生をお祝いするクリスマスが近づいてきました。次週は、クリスマス礼拝です。

皆さんの心は、イエス様をお迎えする準備はできていますか？イエス様は、皆さんを幸せにしたいと願っておられます。クリスマスを前にイエス様の誕生について見ておきましょう。

約束されたイエス様の誕生

本当に不思議なことです、イエス様は生まれる何千年も前から生まれることが約束されていたのです。それは、神様の言葉である聖書に記されてあります。イエス様が誕

生される約七百年も前にイザヤという預言者がいました。そのイザヤが記した書物に、「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名をインマヌエルととなえられる」とあります。これは、イエス様のことです。

皆さんの中で「僕は二三四五年も前から生まれることができますに決まっていたよ」という人がいますか？イエス様は不思議な方ですよ。

神様は、アダムとエバが犯した罪によって苦しむ多くの人々を救いたいと願っておられました。その方法として、神様はイエス様という人間の姿となつてこの地上に、約束の通り来られたのです。神様は、遠い昔から全人類の救いのため、考えられないほどの計画を立てられました。それを、イエス様によって実現するために、イエス様の誕生があるのです。

聖霊によるイエス様の誕生

先週も聞きましたが、イエス様はこの世に來られた時、突然に、しかも最初から大人の姿で來られませんでした。イエス様は、マリヤのお腹から赤ちゃんとして誕生しました。ヨセフとマリヤは婚約をしていました。

「ヨセフさん、わたし子どもを授かりました」。

12月

16日 礼拝メッセージ例

「えっ！何だつて！」

当時はまだ一緒に暮らしていない者たちに子どもが与えられることは、罪とされていました。その罪の罰は非常に重いものでした。

「どうしよう。これではマリヤがかわいそうだ」。

ヨセフは考え苦しんだゆえに、婚約を取り消し、静かにマリヤと分かれることを決意しました。

しかし、そんな中、ヨセフの夢に天使が現れて言いました。「ヨセフ、恐れないで妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤは、聖霊によって身ごもったのです」。

ヨセフは、天使の声を聞いて、マリヤに宿った子どもは、神様が与えて下さったと信じました。そして、マリヤを妻として迎え入れたのです。

ヨセフとマリヤの間に誕生したイエス様は、人間の力ではなく、神様の不思議な力である聖霊によるものでした。

私たちを救うイエス様の誕生

ヨセフに語られた天使の言葉には続きがあります。「その子を、イエスを名付けなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。

イエス様は、この地上にしっかりとした目的をもって誕

生されました。それは、罪に苦しむ多くの人々を救うためでした。では、罪に苦しむ人々とは誰のことでしょうか。皆さんには関係のないことでしょうか。いいえ、イエス様は、あなたを救うために誕生されたのです。

私たち人間は、生まれた時からすでに罪を抱えています。罪とは「神様に逆らうもの」です。私たちは神様によって造られ神様に愛されている存在です。ですから、神様にながっていないければ幸せになることはできません。でも、罪は神様と私たちのつながりを妨害するものなのです。もし、神様に心がつながっていないければ、良いことも悪いことも分からなくなってしまうのです。そして、罪に心が支配され、自分だけではなく周りの人たちを傷つけてしまうことになるのです。

まとめ

私たちは、みんな恐ろしい罪から救われなければなりません。私たちを完全に救ってくださるのは、イエス様しかおられません。私たちを救うためにこの世に誕生されたイエス様を信じましょう。

♪さあ イエスさまを信じましょう♪

(ホーリネス子どもさんびか 60)

聖書 マタイ2・1〜12 テーマ 王なるキリストを迎える

序論

(金井信生)

キリストの誕生を知って、お会いするために東の国から博士たちが訪ねてきました。彼らはキリストを王として迎え、お従いする思いをもつてきています。

一、キリストを拝むために

博士たちは、一つの不思議な星を見て、ユダヤの国に新しい王が生まれたことを知りました。そしてエルサレムに来て尋ねたときに、〈そのかたを拝みにきました〉と、目的をはっきり告げています。ただ見たい、知りたいたいという思いではなく、「拝む」ためです。

キリストは〈ユダヤ人の王としてお生れになったかた〉ですが、ユダヤ人だけではなく世界の救い主です。博士たちは、世界の救い主、自分の救い主を探し求めて、遠くまで時間もお金も費やしてやってきました。これまで自分たちの神を拝んでいても、多くの学問を身に着けても、財産を得ても満たされない思いをいだいていたからです。

当時、ユダヤの国を治めていたのはヘロデ王です。彼らも救い主がやがて来られることを信じ、祈り待ち望んでいたはずですが。しかし、ヘロデ王もエルサレムの人々も、博士たちの言葉に不安をいだきました。ヘロデにとつては自分の王位がおびやかされる不安であり、町の人たちは王位をめぐる争いにまきこまれる心配です。どちらも今手にしている安定を失いたくないという恐れです。

二、キリストを拝み、ささげた

博士たちはベツレヘムにむかい、幼な子イエスを王として拝み、宝の箱を開けて、贈り物をささげました。

まだすばらしい教えを説くわけでもなく、驚くような奇跡を行うこともない幼な子の前に、どうして博士たちは高価な物を献げたのでしょうか。それは、何もかも整った中に生まれ育つのではなく、不足だらけで苦しみばかり多い生涯を送られようとする姿に、この方こそまことの救い主であると認めたからです。

クリスマスにお生まれになったイエスの生涯は、苦しみと連続です。しかしイエスはこれを不満とされませんでした。むしろ、私たちの苦しみを負い、最後は十字架につけられて殺される道に、自ら進んでくださいました。

この世の考えは、人に与えることよりも自分が受けることを求め、救い主が来られたことよりも自分の持つているものを守ることの方が大事だと思えます。イエスの生き方は、そういう考えとはまったく違う生き方です。栄光を捨てて世に降られた方だからこそ、学者たちは、救い主を認め、伏し拝みました。そして喜んで高価なものを惜しみなくささげました。

三、キリストに従うものに

博士たちは、ヘロデ王から戻って報告するように命じられていましたが、〈ヘロデのところに帰るな〉と、夢でみ告げを聞き、エルサレムに向かわずに別の道を通って帰っていきました。

イエスを王であるキリストとして拝んだ博士たちは、自分たちが献げたものより、もっとすばらしいプレゼントをもらいました。それは、神に愛され、見守られている平安であり、キリストに導かれて、真理に歩む新しい生き方です。

キリストに導かれ、従う新しい生き方は、自分の生涯に対する見方を変えます。〈黄金・乳香・没薬〉はいずれも一生涯を費やすほどの高価なものです。しかし、キ

リストの恵みをいただいたときに、宝物は自分のものにするためではなく、ささげるため、神様の御用に用いていた。だからあつたことがわかります。

ヘロデ王やエルサレムの人々のように、今持つているものを失わないようにしようと思うだけでは、不安が増すばかりです。むしろすべてを治め、すべてを知っておられる神様に委ねることで平安を得ることができるのです。

博士たちは、自らを犠牲としてささげ、自己主張の争いの絶えないこの世に来てく、ださった救い主の前にひれ伏しました。そして自分に与えられているものを喜んで主にささげ、自分のためではなく、他の人のために用いる生き方に決心して進んでいきました。ささげる者を主は用い、喜びで満たし、さらに祝福してください。

結論

私たちもキリストを心に王として迎え、神から与えられているものを喜んで献げ、主の導きに従いましょう。

研究資料

(中島啓二)

東方の博士たちの出来事が象徴的に示すのは、救いとは、ユダヤ人だけにでなく、全ての国民に注がれる恵みだということである。それは、神がアブラハムに対して約束されたことであり、さらに預言者たちを通して繰り返し語られたことであつた。この場面には二人の王が登場する。この世の王へロデと、まことの王としてお生まれになったイエスである。自分の王位にしがみつき、まことの王を拒むへロデと、まことの王の前にひれふす博士たち。この両者の正反対の姿が、この章の重要なポイントと言える。すなわち、この恵みをもたらす救い主を前にするとき、人は彼を受け入れるか否かで、自ずと二つに分けられるのである。

テキスト

1 ヘロデ王の代 ヘロデ大王は紀元前4年に没している。16節で「二歳以下の男の子を、ことごとく殺し」ていることから、イエスの誕生は紀元前5、6年頃と推測される。ちなみに西暦(紀元前BC)キリスト以前、紀元(AD)主の年)は、ローマの神学者ディオニュシウスにより、キリストの誕生を基準にして6世紀に定められたが、その時代の知識が限定的であつ

たことなどから、実際には数年のずれが生じたようである。
ユダヤのベツレヘム エルサレムから約8キロ南。ダビデの故郷であり、「ダビデの町」(ルカ2・4)と呼ばれる。東からきた博士たち 「博士」(ギ)マゴス)は後に魔術師の意になるが、その時代にはその意味はなく、「(天文に通じた)賢者」の意であつた。「東」はアラビヤ、ペルシャなど諸説があるが、大規模なユダヤ人社会が形成されていたバビロンが有力な候補である。いずれにしてもユダヤの宗教・文化が広く知られている地域であり、博士たちもその影響を受けていたのだろう。伝統的に3人とされるのは、贈り物が3種類であつたことからの類推に過ぎない。エルサレムに着いてユダヤの新しい王に会うのに、王宮のある都がふさわしいと博士たちが考えたのは、当然であろう。

2 ユダヤ人の王 マタイでは他に受難記事(27章)であざけりの意で用いられるのみ。へロデが4節で「キリストは…」と言ひ換えているように、預言に基づいて待望されてきた「救い主」を指す表現。ただし、当時の救い主に対する期待は政治的なものであり、その期待が外れたゆえに、受難におけるあざけりにつながっていくのである。その星 ハレー彗星(BC12年)であるとか、794年に一度、金星と水星が魚座の

中で接近する天文事象（BC 7～6年）であるなどの説明があるが特定はできない。より大切なことは、自然現象であれ、超自然的なことであれ、偶然ではなく神の導きによってなされたということである。そのかたを拝みにきました。「もろもろの王は彼の前にひれ伏し、もろもろの国民は彼に仕えるように」（詩篇72・11）との預言の成就と言える。彼らの明快な態度は、次節以降の人々と極めて対照的である。

3 ヘロデ王は…不安を感じた ヘロデはユダヤ人ではなくローマの後押しで王位を得たイドマヤ人であったので、国民からは不人気であった。それゆえ預言に基づく救い主の誕生は脅威であつたろう。エルサレムの人々もみな…民の不安はヘロデのそれとは異なり、王が残酷な行動を起こすのではないかという不安であつたかもしれない。

4 祭司長たちと民の律法学者たち 彼らは旧約の預言に通じてはいたものの、それに対するふさわしい応答をすることができなかった。

5～6 ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さい者ではない 「あなたは…小さい者だが」（ミカ5・2）が、「決して最も小さい者ではない」となっている。預言の成就に伴って、本来の意図が前面に出て

きたと解釈して良いだろう。おまえの中からひとりの君が出て…サムエル下5・2の引用。

7～8 ヘロデはひそかに…わたしも拝みに行くから イエス殺害の意志を抱き、そのために博士らを利用しようとする策略家ぶりが表れている。

9 彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで…その上にとどまった 星がどのように動いたかは具体的に想像しにくい。より大切なことは、彼らを救い主探訪の旅にいだなった主が、最後まで確かな御手をもって導かれたと言うことである。

11 ひれ伏して拝み…黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた 古代東方において、贈り物は服従と忠誠を示す行為であった。教父たちやルターは、三つの贈り物に、イエスの王権（黄金）、神性（乳香）、受難（没薬）の意味を見いだす。

12 夢で…み告げを受けたので…一切は徹頭徹尾、神の摂理によって導かれた。主の計画はこの世の王でさえ妨げることはできないのである。

参考図書 12月16日分と同じ。

聖書

マタイ2・1～12

タイトル

王であるキリストを歓迎します！

暗唱聖句

ユダヤ人の王としてお生れになったか
たは、どこにおられますか。

マタイ2・2

目標

キリストを心に王として迎える。

導入

(飯田勝彦)

「クリスマスおめでとうございます！」

二〇一二年のクリスマス礼拝を皆さんと迎えることができ感謝です。皆さんも毎週クリスマスを、首を長くして待っていたでしょう。私たちは、このクリスマスを迎える前にアドベントを過ごしました。お祈りをし、心の備えをしてきましたね。その準備万端な心に、イエス様がお入りになることを信じます。

王であるキリストを歓迎しない

イエス様の誕生は、遠い昔から約束されていました。それは、神様のみ言葉である聖書に預言者を通して記されていることでした。イエス様がお生まれになる少し前、東の国の博士たちがひとときわ輝く星を見つけました。

博士A 「あつ！あそこに不思議に輝く星があるぞ」。

博士B 「あれは、ユダヤ人の王として来られたキリストを表す星だ」。

博士C 「キリストがお生まれになったんだ。王なるキリストを礼拝に行こう！」。

博士たちはキリストを求めて、はるばるエルサレムに來ました。そこでヘロデ王にユダヤ人の王がどこでお生まれたかを聞きました。しかし、ヘロデ王は「なに！ユダヤ人の王だと。けしからん。早いうちに殺してやる」と、学者たちを呼びつけキリストの生まれる場所を調べさせたのです。

ヘロデ王に、王であるキリストを歓迎する心はなく、キリストは彼にとつて必要のない者だったのです。このヘロデ王は、後にベツレヘム周辺の子どもを皆殺しにしてしまいました。

皆さんの中には、このヘロデ王のような心はありませんか。王であるキリストを必要としない心は、自己中心な心です。それは、自分だけではなく周りの人々を悲しませてしまうことにつながります。

王であるキリストを歓迎した

博士たちは「王であるキリストはベツレヘムで生まれるこ

とになっていること」を聞きました。そして早速、ベツレヘムへ向かいます。

博士A「あつ、あの星は！」

博士B「あれは、あの時と同じ星だ。」

不思議なことに、東の国で見たあの星が表れたのです。そして、博士たちを先導して進んで行きました。その星が、博士たちにとっては大きな励ましになったに違いありません。しばらくすると、星が止まりました。何とその星がとまった先は、幼子のいる家だったのです。

博士たちがその家に入ってみると、そこには母マリヤと共に、王であるイエス・キリストがおられました。彼らは、キリストを心から歓迎し、礼拝したのです。そして、贈り物として黄金・乳香・没薬などをささげました。この贈り物には、王であるキリストに対する彼らの思いが表されています。王であるキリストを歓迎した彼らの心は、喜びで満たされたのです。その喜びは、彼らの生涯の宝となったに違いありません。

王であるキリストを歓迎しよう

ヘロデ王と博士たちの王であるキリストに対する態度は違いましたね。ヘロデ王は、王であるキリストを歓迎しませんでした。その理由は、自己中心だったからです。でも、博士

たちは王であるキリストを歓迎したのです。

では皆さんは、王であるキリストをあなたの心に歓迎しますか。王であるキリストを心に迎えるのとそうでない人生は、大きく違います。

イングランドの女王は、いくつかのお城を持っています。人々は、女王がお城に滞在中か、いなかを見分けることができるそうです。それは、旗です。お城に旗が掲げられていると、そこに女王が滞在しているというしるしなのだそうです。もし、皆さんの心に自己中心の自分という王ではなく、王であるキリストに住んで頂くなら、あなたには喜びの旗が高く掲げられます。そして、周りの人たちは、あなたのその喜びを通して王なるキリストを知ることができるようになります。

まとめ

皆さん、いつも喜んで、どんなことにも感謝しながら歩みたいと思いませんか。その秘訣は、あなたの心に王なるキリストを迎えることです。

「王であるキリストを私の心にお迎えします」と心からお祈りしましょう。

♪もろびとこぞりて♪ (ホーリネス子どもさんびか 30)

聖書 I テサロニケ5・16・18

テーマ 万事感謝

序論

(金井信生)

テサロニケのクリスチャンたちが、救いの喜びのうちに歩んでいることを聞いて喜んだパウロは、なお主の再臨が近いことをおぼえつつ、主と共にある聖なる生活に励むように勧めました。そして最後に、誰でも、そしてすぐにでも始めることができる、具体的なこととして、〈いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい〉と教えています。

一、神の御心に従う

「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する」のは、私たちが決めた目標ではありません。〈神があなたがたに求めておられること〉、すなわち「神の御心」です。神の御心とは、単なる願望ではありません。どうしても実現させたいという切なる願いであり、また計画です。天地創造以来、「神の御心」は必ず実現するべきものですが、ただ人間だけは自由意志を与えられ、神の愛に応えて自ら応答する責任が与えられました。

私たちがみ言葉を通して示された「神の御心」に従う決心をするとき、実現に至るように励まし助けてくださるのも主の御計画です。

ノアの造った箱舟のことを思い出してください。神はノアに大洪水を予告され、箱舟を造るように命じられました。ノアは神の言葉に従う決心をし、神はノアに必要な大きさや材料を示されます。

私たちも、求められているのは、「はい、喜びます。祈ります。感謝します」という具体的な応答です。「喜び、祈り、感謝できる」材料も必要性も聖書全体の中に教えられています。

二、従うことが出来る

第一の勧めは〈いつも喜んでいなさい〉です。これは「どんなことでも喜びなさい」ではありません。自分の望まないこと、都合の悪いことは必ず起こってきます。その中で、「あなたはどんなときでも喜べるものを持っているわけではありませんか」というのです。

ピリピ書は「喜びの手紙」といわれますが、書いている時のパウロは、年老いて持病に悩み、監禁されている状況に置かれていました。それでもパウロのうちにはい

つも喜びがあります。キリストによって救われた喜び、いつも主の平安に守られている喜び、やがて主の前にすべてが感謝に変えられる希望に立つ喜びです。

第二は「絶えず祈りなさい」です。この「絶えず」という言葉は、パウロが祈りに結びつけて何度も用いている言葉で、継続性を表わし、祈りをやめてはならないという意味です。

手を組んで目をつぶり、祈る時間そのものは限られているかもしれませんが、しかしここで命じられているのは、主との交わりを常におぼえていること、その表れが祈りであるということです。

とっさの時に、「困った、どうしよう」とか「誰か助けて」と口から出る前に、「主よ、困りました、どうしましようか」、「主よ、感謝します」などなど、いつでも主が共におられる親しい交わりに歩むのが、「絶えず祈る」ことです。

三つ目の「すべての事について、感謝しなさい」は、あらゆる物事に対するわたしたちの受け止め方です。「どんなことでも神の許しなしには起きないのだから、まず感謝してみなさい。そうすればすべてが恵みに変わ

る」と教えているのです。神は愛をもつてすべてを治め、私たちを救いと命に導いておられるのですから、この出来事も、神が私に与えられたのであり、私を祝福するためだと受け取ることでです。

神は嵐を鎮め、困難を祝福に変えてくださる方です。ただ、感謝して受け取ることを知らなければ、その祝福を見ることができません。

三、感謝の土台

三つの勧めに共通している土台は「キリスト・イエスにあつて」ということです。この鍵をもっていれば、喜びと祈りと感謝が、いつも開かれています。

いつどんな時でも「キリスト・イエスにあつて」歩んでいるので「キリスト者」と呼ばれるのです。パートタイムではなく、フルタイム、キリストの愛のうちに住み込んでいるキリスト者にならせていただきます。主が共におられる幸いが、日々自分のものとなってきます。

結論

キリストの恵みをおぼえ、喜びと祈りと感謝に満たされて歩みましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈

Ⅰテサロニケは全体として、主イエスに対する信仰の故の困難(迫害)に直面している信仰者の群れに対して、主の再臨を待ち望む信仰と、それに基づく聖い生活を勧める文書である。その末尾において、具体的な信仰生活に関する勧めと励ましの文脈の中で、この箇所の言葉が語られている。

14「22節の勧めの中で、「すべて」(ギリシア語: *πάντες*)という言葉が繰り返し用いられている(14「すべての人に」、15「みんなに」、16「いつも」、18「すべてのことについて」、21「すべてのものを」、22「あらゆる種類の悪から」)。そのことは、10節の「さめていても眠っていない」、私たちが主と共に生きるため」との救いの目的の記述や、23「24節の「全く」「完全に」(ギリシア語: *ὅλως*)神が守って下さるようにとの祈りの言葉に対応している。従ってこの箇所の命令は、再臨を待ち望むキリスト者が常に心がけておくべき生き方についての勧めの言葉として読むべきであり、救いの事実と、救いを完成して下さ

る神への信頼を前提としている。ピリピ4・4〜7との並行関係にも注意。

テキスト

16 **いつも喜んでいなさい** 現在時制の命令形は、継続した動作や習慣を要求している(以下同じ)。「いつも(すべての時に)」という副詞と共に、特定の出来事や状況のみを喜ぶのではなく、喜ぶことが我々の習慣となるまでに神の恵みに満たされることを期待し、命じている。

17 **絶えず祈りなさい 絶えず(ギリシア語: *ἀδιαλείπτως*)** は時間的に「途絶えることなく」の意味で、前節の「いつも」と意味は同じ。現実には二四時間途切れることなく祈ることは不可能だが、そのようなことを命じているのではない。祈りの姿勢と習慣がつねに身についている状態を求めているのである。

18 **すべての事について、感謝しなさい** 前二つの命令と同様、感謝が基本的な生活態度となることを求めている。 **すべての事について(ギリシア語: *ἐν παντί*)** は、動詞「感謝しなさい」の目的語ではなく副詞句。「すべてのことにおいて」、あるいは「あらゆる場合に」と訳した方が正確である。ピリピ4・6「事ごとに」と同じ。

これが〔キ〕トゥート 三つの命令を単数形の代名詞で受けていることは、これらが別々の命令ではなく、全体でワンセットの命令であることを示している。「喜び、折り、感謝」は互いに切り離すことができない。神が求めておられること〔キ〕セレーマ・テウー 直訳は「神の意志」。「これが神が求めておられること」、原文ではこの順序で続いており、先の命令が神ご自身の意志（御心）であることが強調されている。また接続詞〔ギ〕ガルが前後の文をつないでいる。この語は、強調なら「実に」と、理由なら「なぜなら」と訳せる。ここでは後者が適切。信仰者が喜び、祈り、感謝の生活を送ることが神の御意志であるからこそ、パウロはこの命令を書き送っているのである。「神のみこころは、あなたがたが清くなること」（4・3）が、清い生活を命じる根拠とされているのと同様。キリスト・イエスにあって〔キ〕エン・クリスト・イエスー 「神の御心」に直接かかる副詞句。場所的に「キリスト・イエスにおける」（すなわち、「キリスト・イエスにおいて見られる」、または「キリスト・イエスの内にある」）「御心」とするか、手段・原因として「キリスト・イエスの故に」と解釈することも可能である。

本書、またパウロにおける「キリストにあって」「主にあって」の用法からすれば、「キリストとの一体性において」と解釈することが最も妥当であると思われる。あなたがたに 前置詞として〔ギ〕エイスが用いられている。「あなたがたに對する」、あるいは「あなたがたに向けられた」神の御心、である。いずれにせよ、神があなたがたに求めておられることは、この場合、要求や命令ではなく、ましてや強制では全くあり得ない。この原文は、信仰者が「いつも喜び、絶えず祈り、あらゆる場合に感謝する」、その生き方を、だれよりも神ご自身が願っておられることを示している。そして神は、キリストにおいてその御心をわれわれに適用し、われわれ自身の願いと行為において神の御心を受け止めるよう促してくださるのである（ピリピ2・13原文、「神はわれわれの意志と行為の両方に働きかけて、御心を実現して下さい」参照）。

参考図書 小林和夫『テサロニケ人への手紙』、F. B. Bruce (WBC)、『ギリシャ語新約聖書釈義辞典』。

聖書

Ⅰテサロニケ5・16～18

タイトル

感謝、感謝、感謝

暗唱聖句

すべての事について、感謝しなさい。

目標

Ⅰテサロニケ5・18

一年の歩みを振り返り、そのすべてを神に感謝する。

導入

(飯田勝彦)

今日を入れてあと二日で二〇一二年が終わります。今日は、今年最後の礼拝です。今年も皆さんと一緒に神様の前に出て祈ることが出来ました。賛美をささげることが出来ました。また、一緒にみ言葉を聞くことができたことを感謝します。

皆さんにとってこの一年はどのような年でしたか？良い一年だった人も、悲しく苦しかった人も、この一年の最後、感謝の気持ちを持って終えることができたら嬉しいですね。そして、新しい一年を神様に期待しながらスタートしましょう。

神様のみこころ

皆さんはよく「神様のみこころを行う人になりました」と聞くでしょう。「みこころ」って何だと思えますか？そ

れは、「神様の喜ばれること」ということができます。皆さんも人から自分の喜ぶことをしてもらうと嬉しいでしょう。そのように、神様も私たちが神様の喜ぶことを行つて欲しいと期待していただくのです。ちなみに神様の喜ばれないことは何でしょうか。そう、罪です。神様は私たちが罪を犯してしまうことを喜ばれません。

皆さんは、お父さんやお母さんが喜ばないことをして、楽しいですか。楽しくないでしょう。私たちも父である神様の喜ばれないことをしても、ちつとも楽しくないのです。大好きな人に、喜んでもらえることは何かなと考えませんか。それと同じように、神様のみこころは何かと、いつも考える人にされたいですね。

でも、いつの間にか「みこころ」が「ミー(me)こころ、(私)の心」にならないようにしましょう。

神様のみこころである生活

神様のみこころである生活は、どんな生活でしょうか。それは、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する生活です。皆さんは喜ぶときには喜び、祈れる時には祈り、感謝できる時は感謝する生活をしていると思います。でも、今朝のみ言葉で大切なことは「いつも、絶えず、す

12月

30日 礼拝メッセージ例

べての事について」です。皆さんは、いつも喜んでいますか？ 絶えずお祈りをしていますか？ すべての事について感謝していますか？

生活をしていると苦しいことも悲しいこともあります。

お祈りができないこともあります。また、感謝できないで不満を言ってしまうことも、もちろんあります。ですから、いつも喜び、絶えず祈り、すべての事について感謝する生活なんて「無理だ！」と思ってしまうです。でも、神様のみこころは、いつも喜び、絶えず祈り、すべての事について感謝する生活です。皆さんも出来ることなら、このような生活がしたいと思うでしょう。でも、「私たちにはできないことを、どうして神様は言われるの」と神様に言いたくありませんか？ これは、私たちには出来ないことですが、神様はちゃんとそれが出来るように力を与えて助けてくださるのです。

イエス・キリストが秘訣

神様のみにこころに沿う生活の秘訣は、18節にあります。皆さんで読んでみましょう。「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」。秘訣は、イエス様

です。私たちは、イエス様にあっていつも喜び、絶えず祈り、すべての事に感謝できるのです。

皆さんもこの一年喜べないことがあったと思います。それを無理して喜ぶ必要はありません。喜べないこと、祈れないこと、感謝できないことは正直に神様に「神様、僕は喜べません！ 祈れませんか！ 感謝できません！」と言つてもいいんですよ。その時、思い出して欲しいことは、喜べないこと、祈れないこと、感謝できないことを全部知つてくださっているイエス様が共にいてくださっていることです。それを思うと嬉しくなりませんか。実際に嫌なことがあつても、イエス様がこのことも知つてくださっているから喜びます。祈れないけど、「祈れませんか！ 助けてください！」と祈ります。感謝できないけど、イエス様がこのことを知つていてくださるから感謝します。イエス様が秘訣です。

まとめ

この一年もいろんな事があつたと思いますが、イエス様にあって感謝しましょう。感謝に満ちた生活には、喜びと祈りがあふれます。良いお年を！

♪主にしたがいゆくは♪

(ホーリネス子どもさんびか 87)

牧羊ひろば



明野キリスト教会

主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

詩篇 一一八・一

明野キリスト教会は、今から十六年前、一九九六年に京都府の南部に位置する八幡市に献堂されました。隣接する大阪府枚方市には、同じ日本イエス・キリスト教団の枚方希望教会があり、そこから生み出された教会です。近くには木津川、宇治川、桂川の三川が合流し、淀川となつて南西へ流れて行く雄大な風景が広がり、治水を目的とした背割堤には延々と桜並木が続きます。また、教会からは、標高一四三メートルほどの男山が望めます。山のかなりの部分が住宅地となっており、近年開発された新しい街並みには、子どもたちの姿も多く見受けられるようになりました。

●教会学校の始まり（一九七三年頃）

八幡市に男山団地が造成され始め、最初の入居が始まったのは、約四十年前のことです。A棟に一軒のクリスチャンホームが引越して来られました。「福音を伝えたい」という熱い思いを持ったこの家族のご自宅で、最初は十人位の子どもが集まり、土曜子ども学校が始まりました。その頃、枚方希望教会では「男山地区にキリスト教会を！」というビジョンが掲げられていました。そうした中、この子どもだけの小さな集まりは、場所を団地内の貸し部屋に移し、大人のための集会も毎週開かれるようになりました。次には男山団地の一軒を購入して枚方希望教会の男山伝道所となり、また次には十字架を立てることのできる教会堂をとの思いが起こされ、やがて明野地区に教会堂を建設することができたのです。

明野キリスト教会の始まりが、一つのクリスチャンホームのご自宅で始まった小さな教会学校であったことを思う時、主の恵みの確かさを感じます。そして、当時の牧師や教会員、神学生の方々の祈りと、捧げられた奉仕を思い出します。

●明野キリスト教会 教会学校（一九九六年頃）

明野に新会堂ができると、教会員の子どもや家庭集会に集う人の子どもが、日曜日、主日礼拝後の教会学校に集いました。近くに橋本小学校とそれに付属した幼稚園があり、下校時に教会の「子ども大会」のチラシをもらった小一の男の子が「絶対行きたい！」と言って、お母さんと幼稚園の弟さんと一緒に来たこともありました。間もなくお母さんはイエス様を信じて洗礼を受け、現在は教会学校の教師として奉仕をされています。男の子は、周りが目を回すほどの元気さでしたが、今では感じの良い青年となり、数年前に洗礼を受けました。他の教会員の子どももそれぞれに洗礼を受けたり、日曜日の中高科に集ったりしています。

その後、教会員のお孫さんが友だちを誘って集うようになりました。けれども、最近の子どもたちは暇ではありません。子どもたちが集いやすい曜日や時間を考える必要が出てきました。

●CS土曜学校（二〇〇九年）

二〇〇九年からは、毎月二回、土曜日の午後二時に土曜学校を始めました。途中から変更して午前九時半に、翌二〇一〇年一月からは毎週午前九時半に土曜学校を開くよう

になりました。子どもたちの都合に合わせて、教会学校の開校日と時間が次々と変わった頃です。その子どもたちが中学生になると、せっかく土曜学校になじんでいたにも関わらず、部活などで来られなくなってしまうました。それでも中学に入学した最初の頃は「私の教会よ」と言わんばかりにふらりとやって来ることもありました。その子どもたちを最後に土曜学校には一人の生徒もいなくなってしまうました。メッセージを準備してきても、聞いてくれる子どもがいまません。クリスマスホームにも小学生がいなかったのです。春から夏にかけて、それでも牧師と四人の教師たちは集いました。そして、新しく子どもたちを誘うことについて、話し合いました。

●CS子ども大会（二〇一〇年九月）

夏休みが終わったのを見計らって、教会から歩いて二三分の距離にある橋本小学校の校門前で「子ども大会」のチラシ三百枚ほどを配りました。手描きのポスターを掲げ、目立つように風船を身につけて、「聖書の学びと祈り会」のメンバーにも手伝っていただきました。

興味をもって寄ってくる子、大人のように小さく手を振って「結構です」と言う子、無視する子、風船を欲しがる子、

いろいろな反応がありました。子ども大会の当日、十人を少し超えるほどの子どもたちが集いました。子ども大会は、毎月一回土曜日の午後二時からで、礼拝（賛美、祈り、メッセージ）、いくつかのゲームとおやつ（の時間）をもちます。その他の土曜日は普通の土曜学校としました。子ども大会と普通の土曜学校の内容に、特別大きな違いはありません。けれども毎月一回「子ども大会」と銘打って、チラシを配ることに意味がありました。集まる子どもの数は、回数を重ねるにつれ少しずつ減ってきました。それでもいつもだれかが集いました。そして、嬉しいことに、その中に普通の土曜学校にも必ず顔を見せる子どもが数人でできたのです。

●CS土曜学校（二〇一〇年 九月以降）

チラシ配りによって毎週来るようになったのは小学校二年生の二人と幼稚園児一人です。その他に数人が入れ替わり立ち替わり集まり、それは賑やかです。当時の校長先生が「五十年間、教会学校の教師をしてきましたが、こんな元気のいい子どもたちは初めてです」と苦笑されたほどです。たとえ四、五人しか出席していない時でも、十人くらいで賛美しているかと錯覚をするような大声です。礼拝で

は競って聖書の朗読をしたがり、メッセージの途中にはするどい質問や、的外れの意見をはさみます。時に騒がしくなりすぎるので、教師のだれかが思わず大きな声で叱ることもあります。厳しくし過ぎて、かたちだけ整った律法主義にならないように、また子どもたちが教会学校を嫌いにしないように・・・と、クリスチャンホームの子どもが一人もいないこの教会学校のために、教師たちは心を砕いて取り組みました。

こうして、半年間の毎月のチラシ配りと子ども大会は、子どもが一人もいなかった明野のCS土曜学校に数名の元気な子どもたちを定着させてくれたのです。

●CS土曜学校（二〇一一年）

定着した子どもたちは学年が上がっても、顔を見せてくれました。学年が上がると不思議なように、礼拝時の騒がしさは少しおさまりました。それでも質問や意見、リラックスしすぎた態度は続いています。ところが、このメッセージをしながらの応答で、子どもたちが思いがけないほど話の内容を把握していることが分かります。時には先週、先々週のメッセージについてが、その口から出てきます。また、罪の話をしていると、自分の心の中にも真つ暗闇

(罪)があるとはつきり言う子どももいます。「みなさんは土曜学校以外でも、イエス様にお祈りしたことがありますか」と聞いた時には、一人の女の子が「毎晩、一人で祈りしてる」と答えました。

この年の土曜学校は、礼拝、ゲーム、おやつに加えて、み言葉カードとワークに取り組みました。ゲームの時間が減ってしまい、一度不満が出ましたが、その後は順調に続いています。また、奏樂の奉仕をして下さる姉妹があり、賛美の曲も増えてきました。

子どもたちのお誕生日会も始めました。教師たちで心を込めてカードに寄せ書きをします。その日はおやつもちよつと楽しい雰囲気、出来る限りは手作りで心がけています。ただし、問題があります。子どもたちは「クッキーは嫌い」「チョコレートが嫌い」「ケーキは食べへん」「生クリームは気持ち悪くなる」「レーズンはいや」と口々に訴えて来るのです。今のところ、お誕生日会の人気メニユーはアイスクリームケーキとポテトチップスとききいかです。お誕生月の子どもが、ろうそくの火を吹き消すというイベントは何があっても欠かせません。

●CS子ども大会(二〇一一年)

六月と十二月に子ども大会を計画しました。十二月のクリスマス子ども大会には、CS教師研修会で頂いた知恵を用いて、チラシに工夫をしました。しっかりとした色画用紙を六枚切りにして、表にクリスマス大会のお知らせ、裏に保護者の方へのおたよりを書き、今後教会からのお知らせをお送りしても良いという方には住所を書いていただくようにしました。全体にかわいらしい手描きの絵を配し、字も丸っこい手書きにしました。この工夫により、子どもたちは殆んど全員が楽しそうにチラシを受け取ってくれました。ただ残念なことに、裏に名前と住所を書いて下さった保護者はお一人だけでした。

◆「六月子ども大会」 一三人参加

ヨーヨー釣り、お名前ビンゴゲーム 紙芝居(三本の木)、おやつ、お菓子のプレゼント

◆「十二月クリスマス子ども大会」 一二人参加

DVD(ストーリーテラーカフェ)、パーティータイム、プレゼント

●子どもたちのこと

一昨年九月からのチラシ配りによって集うようになった

数人の子どもたち、その後加わった子どもたち、時々加わる子どもたち、とびきりワイルドな子どもたちが、時々発する言葉に注意していると、子どもたちはみんな愛されたいと願っていることが分かります。

たまにだれも来なくて、自分一人だけの出席となると、「今日はひとりじめだ」と喜ぶ子がいます。先生たちをひとりにじめ、おやつをひとりにじめ・・・ということかも知れませんが。子ども大会のチラシを配っていると、「あまり配らんといて」と言う子がいます。教会学校を自分の大切なちよつと秘密にしておきたい場所と感じているようです。

いつもと違ってたくさんの子どもが集った日「言っとくけどな。ぼくは初めの日から教会学校に来てんねんで！」と教師の一人に叫びながら帰った子がいます。自分の場所と想っていた教会学校に沢山の子が来ていて、シヨックを受けたのでしょうか。また、子どもたちはたいいのことに文句を言います。ここではどれくらいわがママが許されるのかな・・・と大人を試しているようです。子どもたちはそれぞれに愛をひとりにじめたいようです。

この子どもたちに、尽きることはないイエス様の愛を伝えたい・・・そう願っています。子どもたちのパワーに負

けないように、主に助けていただきながら、今日も明野のCS教師たちは励んでいます。

(有松博美)



きれいに塗れました



プー！



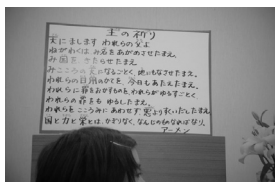
工夫をこらしたゲーム



ふいふ魔球サーブ



今日のおやつは・・・



手づくりの教材



熱戦！風船バレー

— お わ り に —

『牧羊者』二〇一二年度第三巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。今回の教師養成講座は、前号に引き続いて、宮澤清志師に「みことばが語りかける説教」（後半）を書いていただきました。「牧羊ひろば」は、明野キリスト教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

*分級用に、ワークA（幼稚園向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円（税込）でお送りします。

教会学校局ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務所）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19
 電話 (078) 575-5511
 Fax (078) 575-6611

聖書講解 研究資料	金井信生師 中島啓一師 小平徳行師 飯田勝彦師 松浦みち子師 吉田美穂師 野勢かほる師 田中裕明師 石田高保師 田中愛子師 丹羽遥姉 丹羽遥姉 田中愛子師 長田栄一師 長尾秀紀師	高橋頼男師 宮澤清志師 金井由嗣師 和田治師 水野晶子師 小菅央子師 竹崎光則師 田代美雪師 後藤健一師 小野淳子師 青木みぎわ姉 勝田幸恵師 加藤清師 長尾明美師	福井文彦師 金井由嗣師 水野晶子師 鎌野幸師 上森恭子師 松浦あん姉 長尾明美師 山田和幸師
--------------	---	---	---

また、発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（長尾秀紀）

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一二年度 Ⅲ巻

二〇一二年十月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
 企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局
 神戸市兵庫区塚本通三-三-一九

印刷所 菱三印刷株式会社
 電話 (078) 575-5511
 Fax (078) 575-6611

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み
 電話 (078) 576-1396